

預言者の妻たち

現代エジプトの女性歴史家による預言者の妻12人の精彩に富む伝記を紹介します。

転載： 宗教法人日本ムスリム協会 「預言者の妻たち」
アーイシャ・アブドッラハマーン 著
徳増 輝子 訳

(2007年1月26日更新)

目次

【第1章】

[家と夫-その1](#)

[家と夫-その2](#)

[家と夫-その3](#)

【第2章】

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その1 辛い思い出](#)

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その2 逢瀬](#)

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その3 幸福な結婚](#)

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その4 啓示](#)

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その5 悲しみの年](#)

[ハディースジャ・ビント・フワイリド-その6 永遠のハディースジャ](#)

【第3章】

[サウダ・ビント・ザムア-その1 侘（わび）しさ](#)

[サウダ・ビント・ザムア-その2 異郷・寡婦の身](#)

[サウダ・ビント・ザムア-その3 私の夜はアーイシャに譲ります](#)

【第4章】

[アーイシャ・ビント・アブーバクル-その1 縁組み](#)

[アーイシャ・ビント・アブーバクル-その2 一般的風習](#)

[アーイシャ・ビント・アブーバクル-その3 ヒジュラ-その1](#)

[アーイシャ・ビント・アブーバクル-その4 ヒジュラ-その2](#)

[アーイシャ・ビント・アブーバクル-その5 花嫁](#)

第1章

【家と夫—その1】

預言者の妻たちについて述べる前に、この夫人たちの生活の場であった預言者の住まいそのものから語り始める必要があると思われる。

預言者の家は二軒あった。一軒はマッカ（メッカ）の家で、預言者ムハンマドが最初に迎えた夫人ハディースを、ただ一人の妻として睦まじく暮した家であり、ここで彼は子供たちに恵まれている。またそこは彼がその人生に、そしてアラブ民族、および人類全般の生涯に偉大な転換をせまる出来事に遭遇した場でもあった。この家の様子は、私の著書『預言者の娘たち』のなかで、すでに述べたので省略させていただきたいと思う。

一方マディーナ（メディナ）に建てられた二軒目の家では、ハディースを除いた預言者の夫人たち全員が、「信徒の母」と呼ばれて敬われながらそこでともに生活を送ったのであった。この様子は、本書ではアーイシャ夫人の章のところで簡単ではあるが説明されているのに読者は気がつかれることと思う。このアーイシャ夫人こそ、このマディーナの家で、第一夫人の地位をほしいままにした夫人であった。

アーイシャ夫人のあとにあいついで夫人たちが嫁いで来ると、この家では使徒の結婚は社会的にも政治的にもまた立法といった面でも特別な意味を持つものとなってくる。それは25歳のまだアッラー（神）の使命が告示されないときの青年ムハンマドが入居したマッカの家にはみられないことであった。

また、預言者の妻たちについて語る前に、この夫人たちを迎えたこの家の主（あるじ）について語らなければならない。

ここではすでに使徒伝（注1）や歴史に語られている栄光に満ちた彼の偉業を読者が期待しているのではないと思うので、私はここではただ一つの観点からのみ彼をみつめてみたいと思っている。

それは夫としてのムハンマド、これらの素晴らしき夫人たちを迎え入れた一人の男ムハンマドである。そしてこの夫との生活を通して満ち足りた生活を送った夫人たち、彼女たちは、夫の崇高な精神生活に、そして実践生活にともに参与する幸運に恵まれたのであった。

ムハンマドの夫として、人間としての姿、および神（アッラー）の使徒たる預言者としての姿、この二つの像を個々に浮きぼりにしてみること、これは非常にむずかしいことである。神（アッラー）の他の使徒たちの生涯についてはみなそれぞれ人間であり神（アッラー）が彼らについてつぎのように言われているにもかかわらずこのようには語られていない……神（アッラー）は言われる「われが汝（ムハンマド）以前に啓示を授けて遣わした預言者たちはいずれも人間であった」と……クルアーン第12章（ユースフ）109節。

イスラームの教えでは、ムハンマドの人間性を強く打ち出している。それはイスラーム

信条の根本の一つでさえある。ムハンマドの出生も、少しも自然の域をはみ出たものではなかった。

イエス・キリストにみられるごとく、聖母マリアが神（アッラー）のみ言葉により身ごもり、人間の誰も彼女に触れることのないまま、イエスの誕生を迎えたというような超自然的なものはそこには見られなかった。

神（アッラー）の啓示は、彼の心から人間の感情を取り除こうとはしなかったし、また、通常の人間に到達可能な言動以上のことを彼に規制することもなかった。

神（アッラー）が言われたように、彼は「あなた方と同じ人間」なのである。……クルアーン第18章（アルカハフ）110節。

妻を迎え、子供たちを慈（いつく）しみ、すべての人間が陥ると同じように、彼もまた愛に憎しみに悩み、欲望にかられることも自制を迫られることも、恐怖におののくことも、希望に胸ふくらむことも、情に身を投じることもあった。すべての人間にやってくるように、疲労も、不幸も、病いも、死も、彼を追いかけてきた。

「ムハンマドは、ただ使徒にすぎない。これまでに、多くの使徒が逝った。もしムハンマドが死ぬか、または殺されるかしたら、汝らは踵（きびす）を返すのか。汝らが踵を返すとも、いささかも神（アッラー）を害することはできないのだ」……クルアーン第3章（アール・イムラーン）144節。

もし神（アッラー）が望まれたら、預言者をいかなる苦境からも守ったことであろう。子供たちの死を救うこともできたし、ハディースの不幸をもぬぐうことができたろう。アーイシャが受けた偽りの中傷なども起らなかったことだろう。そして彼の生涯は勝利があい続き、攻撃を受けることも、失敗を嘆くこともなかったであろうし、敵の圧迫や裏切り行為、似非（えせ）信者の偽善などに悩まされることもなかったはずである。

しかし神（アッラー）のみ言葉はこうであった。

「言え、神（アッラー）の思召しがいかぎり、私は自分の利にも害にも無力な者である。私が、もし目に見えぬ世界のことを知る身ならば、私は善きをふやして災害にも会うこともなかったであろう。私はただの一警告者で、信仰する者への天の福音を伝達する使者にすぎないのだ」……クルアーン第7章（アルアラーフ）188節。

人類へ神（アッラー）の福音を告げる預言者の到来、これこそなんと人類への誉れある贈物であろう。神（アッラー）は以前にも我々に栄誉を与えて下さった。アダムに、天使たちがひざまづくように命じたのである。人間の父であるアダムに……。

とは言え、ムハンマドは平凡な人間の一人と同じであるはずはなかった。神（アッラー）が最後の啓示を送るためにすべての被造物の中から選ばれた者なのである。

彼は人間であり使徒である。これは彼の私生活上の姿を語るさいに微妙でむずかしい問題となっている。人間ムハンマドについて書こうとする者は、同時に彼が選ばれたる預言者であること、そしてイスラーム教徒の最も重要な証言が、「神（アッラー）の他に神

（アッラー）なく、ムハンマドはその使徒である」という信仰の告白であることを無視することはできないのである。

より問題がむずかしくなるのは、我々は使徒の中にこの二つの人間像が分れることなく溶けあっているのを見ること、また、神（アッラー）が使徒に対してその私生活では一般の人々が到達可能な範囲を越えた（聖職者としての）特殊な生き方など呼びかけなかったことである。

ただ時には、特別に夫婦の問題に関して啓示が降されて、夫人たちと彼との関係は何度か天命に従って改められることがあった。たとえば、偽りの中傷事件を例にあげると、悪意のある人々のでたらめな噂話から、アーイシャ夫人の身の潔白を証した啓示が降りて、事件が解決されたこと、また、ザイナブ・ビント・ジャハシとの結婚の際には、ムハンマドが人々の噂を気にして神（アッラー）の許したもうことを心に隠し、ためらい続けるのを神（アッラー）は好まれず啓示を下してこの結婚を認可したのである。……神（アッラー）こそ畏れるにたるお方なのである。

預言者の妻たちに課せられた厳しい生活は『クルアーン・アルアハザーブ章』のなかの神（アッラー）のみ言葉でなくさめられるであろう。

「預言者よ、汝の妻たちに言うがよい。もしあなた方が東の間のこの現世とそのきらびやかさを望むなら来い。あなた方に補償金（注2）を与えて私は気持ちよく別れよう。だがあなた方がもし、神（アッラー）とその使徒ならびに来世の住まいを求めるならば、そのような善行にいそしむ者には偉大な報酬を神（アッラー）は準備しておられる」……クルアーン第33章（アルアハザーブ）28および29節。

そして預言者の妻たちの振舞いは、彼女たち以外の人びとの生活ではとても普通でないような面まで天の直々の監視がなされている。神（アッラー）は言われた。「預言者の妻たちよ。汝らは他の普通の女たちと同じではない。もし汝らが神（アッラー）を畏れるならば心に病いある者がその欲望をかきたてられることのないよう言葉を軽くしてはならぬ。端正な言葉遣いをせよ。また汝らの家において誦（よ）まれている神（アッラー）のしるしと英智をよく心に留めよ。まことに神（アッラー）はすべてのことを悟り給う御方である」……クルアーン第33章（アルアハザーブ）32および34節。

このような例のいくつかを見ても、預言者としてのムハンマドと、夫としてのムハンマドを切り離して見ることのむずかしさを示すに十分といえよう。

（注1） 預言者ムハンマドの伝記。イブン・イスハークとイブン・ヒシャームによるものが最も名高い。

（注2） イスラームでは離婚した女性は一定期間（3回の生理を経るまで）は再婚できない。その間の生活費を与えることである。

【家と夫ーその2】

ではイスラームの預言者とはどんな人であったのであろうか。

出身地も肌の色も違い、家柄も育ちもそれぞれに異なり、年齢も個性もまちまちなこの数多くの良き夫人たちを、どんな夫と一緒に住ませたのであろうか。

むずかしいことであるが、25歳のとき、二人のおじ、アブータリブとハムザに付き添われて婚姻のため、ハディージャ・ Bint・フワイリドの家におもむいたこのハーシム家の青年の特徴のいくつかを拾いあげることができる。そのとき、彼は預言者ではないただの人間であった。たとえ使徒として送られる準備はすでにできていたとしてもある。

彼はハーシム家の出身で、血筋のよい生まれの青年であった。父親はアブドッラー・イブン・アブドルムッターリブ・イブン・ハーシムで、この人は親の誓いに従って犠牲に捧げられた話（注3）でマッカに記憶されている人で、この話はアラブの先祖であるイブラーヒーム（アブラハム）の息子イスマーイールが最初に犠牲に捧げられた記憶を呼び起させる興味ある話である。

母はアーミナ・ Bint・ワハブ・イブン・アブドマナーフでクライシュ族の良き婦人であったと言われている。

ムハンマドはその幼年時代に、サアド部族という遊牧民（ベドウィン）の中で、何年かを過ごしたことがあったが、この遊牧民の生活は、彼の性格に独特な影響を残している。また、その生活は精神と肉体との健康につながり、けじめの正しい態度、正しい言葉遣いもその間に身についたものと思われる。また、その後迎えたみよりのない孤児としての年月を通して、彼は注意深く物ごとをこなし、早くから責任感にめざめる力を得たのであった。

シリアへの旅は、物の見方を深め、広く世間と接することによって彼の人生により一層豊かな知識と経験を供することになった。そしてまだ若い青年のうちに、彼は忍耐強いできあがった人間になっていた。彼のなかには遊牧民（ベドウィン）の名残りがのぞかれるし、また、アラブ巡礼の地マッカの聖地をめぐる文明度の高い生活から身についた洗練された言動もみられ、旅の経験で得た見聞は彼の知性のうちに光を放っていた。クライシュ族のハーシム家から受けついだ育ちの良さも、その行動のうちに目立っていた。無駄もなく、贅沢もなく、無気力な生活におぼれることもなかった。

ハディージャがムハンマドについて耳にしたとき、彼はこのような人物であった。

部族の人びとが噂する彼の誠実さ、信頼度の深さ、寛容さ、この人徳に今までのすべての男性に閉じられていた彼女の心は開いたのであろう。実際に彼女は彼に出逢い、自分の目で確かめる以前から彼に思いをめぐらしていたのである。

……彼は典型的なアラブであり、肌の色は美しく、背は高すぎず低すぎず、頭は大きく額は広く、あごは長く、首は高く、胸は堂々として手足はたくましく、濃い豊かな頭髪が

おおい、黒い大きな瞳が長いまつ毛の下で魅了するように輝いている。話したり笑ったりするたびに白い歯があらわれて光り、体を前に傾けて急ぎ足に歩き、人の話は全身に注意を傾けて聞き、気さくな快い態度で人びとを迎え、ときおり歯を出して笑いこぼる。

また、怒った時も、けっしてどなり散らすことなどなく、ただ眉をひそめて怒りをあらわす……素晴らしい青年である……と。

そのころハディースはあどけない娘であったわけではなく、すでに世を渡り、世を知り、豊かに人生の経験をつんだ婦人であった。

以前に二人のクライシュ族の男性と結婚をしたこともあり、また、シリアへの商いを依頼したときに、何人もの男を雇用したほどの婦人であった。

彼女のムハンマドに寄せた関心と、結婚への強い望みは、彼女に再婚を求めた多くの男性のなかにはみられなかったものをムハンマドのなかに見出して魅了されたためであるといえよう。ここで繰り返し述べるまでもなく、彼女が当時知ったムハンマドは、理想的な男性でこそあれ、けっして待たれている預言者ムハンマドではなかった。

この人生経験の豊かな婦人が、使徒として送られる以前の15年という歳月を、彼とともに暮したのである。15年間、これは実に、この結婚の真髄を知り、外部には知られない人間の内面を認識するに十分な長い歳月であった。実に結婚生活とは夫を最も正確で精密な尺度で測る試験のようなものともいえるであろう。夫に授けられた啓示にハディース夫人は、深い信仰を捧げたのだった。彼女が選んだ青年、愛した夫、ともに暮して知り尽したその人に少しの疑いも持たなかった彼女、ハディース夫人のその夫に寄せたこの信頼の深さが、その人間の偉大さの証（あかし）ともいえたのであろう。初めて啓示を受けた時の彼の不思議な話を聞いた際にも、彼女はすぐに確信と情熱をこめて力強く叫んだという。

「神（アッラー）は常にあなたを見守っていらっしゃる。あなたは親しく人びとと交わり、深い愛でつながれている方、けっして偽りをいわず、あわれな人びとを助け、客人を大切にもてなす方、正しい真理をかかげる方ですから！」

これが長い年月をともに生活した妻の夫に寄せた言葉であった。そこに神（アッラー）の使徒とし遣わされる以前のムハンマドの人柄がしのばれるのである。それはまた、アリー・イブン・アブターリブの語っていることでも確証されよう。アリーは、ムハンマドの従弟（いとこ）で、二人はアブターリブの家で長年共に育ち、ムハンマドがハディースと結婚したのちには、少年アリーは彼について一緒にハディースの家に移っている。

「彼は非常に立派な人物だ。心の広い人、正直、かつ誠実で、理解が深く、親切で、この点では比類をみない人だ。ちょっと見ただけの人には彼をおそれるが、よく知った人は必ず彼を好きになる……」

アルイスティーブ（注4）のなかのアーティカ・ビント・ハーリドの話では、彼女は、まだムハンマドを知る前に彼を見てつぎのように話している。

「清潔な感じの男性に出会いました。立派な顔つきで姿もよく整った人でした。目は黒くてまつ毛が濃く、首が長く雄々しい声の人でした。髭は濃く、黙っても威厳があり、話すと荘厳さがあり、非常に素晴らしい人、遠くから見ていると美しく、近くで見ているとなおさら美しい人でした。話し方もはっきりとわかりやすく立派で、肩幅は広く、背丈は高すぎもせず低すぎもせず……。

彼のまわりを仲間がとり囲んでいて、彼が何か言えば皆その言葉を聞き、彼が一言命じれば、すぐ命じられたことにおもむくのでした……」

ハディージャ夫人は数多い預言者の夫人たちの中でも一人別格とされている。それは彼女一人が、預言者としての使命を授かる前のムハンマドを男性として、夫として知っていたからである。

我々はここから二人の結婚生活をみることによって、夫ムハンマドの人間像を求めることができるであろう。だからもしこの二人の結婚生活を、その後に預言者の家に嫁いで来た夫人たちの生活と一緒にすることは、ここで彼女たちの生活を正しく描くこともできなくしてしまうであろう。

彼女たちは例外なく、みな夫を預言者と認めていたし、二つの人間像が一体となったムハンマドとの生活の中にはいっていったのであったから……。

我々が安心する点は、それは選ばれたる神（アッラー）の使徒との結婚という名誉に力づけられて、預言者のもとに嫁いで来たどの妻も、家に落ち着き、夫の他の夫人たちに会うやいなや、彼を神（アッラー）の使徒としてよりも、まずは自分の夫として意識するという点である。それゆえ、ここに不満や、競争が、時おりは限度を越えた嫉妬が生じるのであった。もし夫人たちが、夫を預言者として意識して見ていたら、このような争いが、その生活の中に顔を出すことはまずなかったはずであった！

ムハンマドの家庭での生活は非常に人間らしいものであったと思われる。

彼は情にあつく感情豊かに生きようとした。ほんとうに必要なに迫られた、止むに止まれぬ場合を除いては預言者としての厳格な態度で夫人に接することはなかったといえる。

今日、我々がその結婚生活に関して歴史の語ることを読んでみても、精神の不毛や、感情の枯渇など少しもない、生き生きと溢れくる生命力をその生活に見るのである。それは彼の完璧に正しい人間性ゆえであり、それゆえに夫人たちは情熱にもえて意欲的に家庭生活を築き、生活の中から陰りや乾きを追い払うことができたのである。

イスラーム史は、これらの良き夫人たちが、常に夫とともにいて、神（アッラー）の使徒の生涯に力を添えてきたことを認めている。戦いにはともに出陣し、人間ムハンマドを勇気づけ、慰めてきたことを、また重荷を背負う夫をいたわり、イスラームの普及のためにさまざまな苦勞を重ねる夫を励ましてきたことを知っている。

預言者は心いつも若々しく、感情豊かに生き、そして最も愛する妻の部屋で目を閉じながらこの大地から旅立って行ったのである。

カディード（注5）を食べるクライシュ族の一婦人から生れた息子に下された偉大な神（アッラー）の印（アーヤ）を否定するような信仰を掲げる人びとを、神（アッラー）がお許し下さるように……、また、神（アッラー）の使徒は心が愛に高鳴ることなどなく、妻たちと結ばれる際にも感情を持たなかったなどと主張する人びとを、神（アッラー）がお許し下さるように……。神（アッラー）も、その使徒もそれを否定し、我々がムハンマドの中にみるこの完璧なる正しき人間性もそれを否定する。また潤いある豊かな結婚生活を告げる歴史の記録もそれを否定するのである。

（注3）

イブン・ヒシャームの使徒伝によるとアブドルムッターリブは10人の子供に恵まれたら、そのうちの一人をカアバ神殿で神に捧げると宣言していた。子供をフバル神（当時のカアバ神殿に祭られていた偶像神の名）の前に集め、矢軸をひかせると（当時のおみくじのようなものだった。矢軸を使った占いのようなものである）そのとき、一番幼かったアブドッラーの名が出た。しかし、クライシュの人びとの反対にあつて、結局は百頭のラクダが、アブドッラーの代わりに犠牲に捧げられたという。

この出来事が旧約聖書（創世記）のアブラハムの話と比較されている。旧約聖書ではアブラハムが犠牲に捧げようとした息子はイスマーイールではなくイサク（イスハーク）である。

（注4）

イブン・アブドルバッルによる書名

（注5）

乾燥させた肉、（あるいはパン）のことで当時の主要な食糧であった。

【家と夫—その3】

ここでムハンマドの結婚生活の二つの大きな問題点を取りあげる必要がろう。多妻の問題と、その生活上の問題である。前者の問題について、西欧の東洋学者たちは、一人の夫が、これだけの多数の妻を娶（めと）ることは、世俗的な好色のあらわれ以外にないと見ているが、この見方は、冷静さを欠いた誤った解釈である。これは過度の感情に左右されたもので、はるかに遠いムハンマド家の環境と、現代との隔たりを考慮し、我々が新しい尺度で、この多妻制の問題をはかろうとする道を拒んでしまう学究の道からの逸脱である。

そんな彼らに対抗して、私は世間が承知の現状であり、一夫一婦制という形をとりながら、妻以外の関係を持っている、そういった実状を取りあげて反論しようとは思わない。

また、多妻制を、当時のアラブではあたりまえのことであり、時代と環境が定めた常識、すなわち部族組織を持つ社会において、子供は人生の飾りとみなされ、女たちは、多産を誇りとし、男たちは子孫と家系の繁栄を誇りとする、そんな社会の当時の常識であるとして、これをとりあげ、反論しようとも思わない。

私が目を向けていきたいのは、今日の我々が考えているような多妻制は、アラブ女性の隷属の姿であり、不平等で男性本位の制度であったという問題意識なのである。

実に、一夫多妻制は、しばしば男性にとっても重荷となっているし、多妻制よりもあわれな制度からアラブの女性を救っているといえるのだ……。一夫一婦という掟ゆえに虐げられている日陰の女性たちこそ、現代の自由を奪われた奴隷なのではないか。

日陰に生きる女性たちは、大きな犠牲を払っている。そしてみじめな社会も彼女らとともに大きな犠牲を払うのである。不幸な捨て子の問題やおなかをすかしたみなし児たちの問題が生れてくるのである。

女性の立場を守るといって一夫多妻をとがめる人びとのように、いかなる理由であろうとも、夫が別の女性と結婚したならば、夫はかつての妻を留めおいて面倒をみることより、彼女を外に放り出す方がよいと考えているようなことは（同意できない）。

それからまた多妻の問題には、多くの人びとが目をつぶってしまっている点がある。それは男性は女性と（性欲という面で）同じではないということである。おそらく女性は肉体的な欲求の面では、男性と同じよりもむしろその半分ぐらいの欲望で満足することを好むということである……。

しかし、だからといって預言者の夫人たちが一夫多妻の生活に喜びを得ていたという意味ではない。むしろ誰一人として、この多妻との生活に心安らいでいた夫人はいなかったと思う。しかし、これはムハンマドが「人間のなかでも特別な男性」であったことに尽きると思う。夫人たちはたとえ夫ムハンマドがどの妻のもとにいようと、彼以外の男性とともに自分一人の域を持つことよりも、ムハンマドと暮すことを好んだのである。

妻たちの誰一人、夫を独占できると思って預言者の家に嫁いだはずはない。おそらく我々がむずかしく考えるほどではなく、多妻の問題はごく自然に行われていたようである。

例えばハウラ・ビント・ハキームが預言者にアーイシャ・ビント・アブーバクルとサウダ・ビント・ザムアの二人に婚約するよう勧めたことを思い出してみてもわかるであろう。またマイムーナ・ビント・アルハーリスが預言者との結婚を願い出たときにはすでに8人の夫人が彼の家にいたわけであり、またオマル・イブン・アルハッターブが娘のハフサをアブーバクルに申し出たときには、アブーバクルのもとには預言者の義母となったウナムルーマーンがいたのである。アリー・イブン・アブータリブは預言者の娘、ファーティマ（注6）との結婚を渴望していたし、またアブーバクルとオマルの二人、預言者とは義父のつながりを持っていたこの二人は、夫に先立たれたウナムサラマに結婚を申し込んでいたのである。

もし仮に、預言者の夫人たちに、一軒の家で一人の夫をめぐる多妻との共同生活と、別の家でのひとり独立した生活との選択が許されたとしても、彼女たちの生活に代わるものなど望もうはずがなかったのである。

それにもかかわらず、彼女たちはこの多妻との共同の生活に悩みをいだくのであった。妬（ねた）み心に駆られることもあった。どの妻にとっても、夫の心をひとり占めできないということは、やはり淋しいことであった。事実、ムハンマドの家は、静まることのない女の戦いの広場となっているようにさえ思われた。しかし夫の愛を得ようと、またその愛を独占したいと願い競い合う姿に、そんな夫人たちの生き生きとしたバイタリティーの跡を見ることができるのである。

預言者は疑いなくこのことをかなり憂慮していたに違いないが、しかしこれらはどうしようもない自然と本性のうちに生じるものとしてそれに耐えようと努めていた。

今日の時代に生きる我々も、またこれからの人びとも、アーイシャ夫人がかたくなに妬（ねた）み心を持った時につぶやいた彼の言葉に耳を傾けることであろう。「困ったことだが、もし彼女ができたのなら、彼女はそうはしなかったろう……」

何と平和な精神、健やかな心、そして女の本性に対する深い理解のしるしがそこに見られることであろう。

妻たちはそんな寛容さを夫のなかに認めていた。だからこそ預言者の夫人として協調と平和に徹すべき立場でありながら、女の本性がさらけ出るたびに、そこに安らぎを求めるのであった。彼女たちはたとえ妬みの心に駆られても、神（アッラー）の使徒のような情の深い大きな人間は、人の弱さのなかに罪を見ようとしない、女の本性のなかに生じるものを拒もうとしないことを知っていた。

いま、ここにオマル・イブン・アルハッターブが語ったと伝えられる伝承があり、ここにムハンマドの夫としての姿がみられるし、人間預言者の姿の正しい証（あかし）を見ることができるのである……。

オマルは言った。

「全く我々がジャーヒリーヤ（注7）の時代には女は何の重要性もないものと思っていた

が、神（アッラー）の啓示が降されて婦人にも権利を与えたから……私があるとき、あることを行なおうとしたとき、妻が“もしこうだったらこうやって……”と口を出す。そこで私は彼女に“それがあなたとどういう関係があるのか。私のやることはあなたの知ったことではない”と言った。すると彼女は“おかしいですね、オマルよ。あなたはいまだにそんな古い考えを変えないのですか。あなたの娘も我を張って、使徒様を終日怒らせたけれど……”そこでオマルは着替えてハフサのもとに出かけ、彼女に問いかけた。“娘よ。あなたは預言者を終日怒らせるほどに我を張っているのか”すると彼女は“私たちは断じて言い張ります”と言う。そこで親しいウナムサラマのところに行き、事情を彼女に話した。すると彼女は言った。“おかしいですね、あなたは。あなたは何ごとにも関与なさいますが、使徒様とその妻たちの間にまで介入なさいますのか”彼女にたしなめられて自分の怒りをはずかしく思った」

これはオマルや教友たち（注8）がムハンマドを選ばれたる神（アッラー）の預言者とみなしていたが、一方、婦人たちは彼を夫である使徒として見ていたということである。そしてムハンマドは、それに十分満足していたのだった。

人びとのなかには、預言者の夫人たちの間に起きた争いや嫉妬の心を知って心配する人びとがいるが、実際には預言者は限度を越えるものではない限り、それに悩まされることはなかった。極度のものには怒り、きつくいさめることがあった。おそらくそんなとき、夫人たちは痛悔したことであろう。そのほんのまれには厳格な態度であたらざるを得なかったが、いつもは預言者は、偶像崇拝者やイスラームを敵視するユダヤ人たちを相手どった大きな戦いの合間に、自分への愛と嫉妬がまき起す、夫人たちの間の小さな戦いを見守ることを少しもいやがらなかったのである。

おそらく彼女たちのような良き女性が、彼のような良き男性に対して嫉妬の感情をいだくことは一時には彼が通常の夫と異なるのだということを忘れ去るほど、夫の愛をめぐって競い争うことは—それ自体が男性を満足させることでもあったろう。彼は妻たちのうちに存在する女の本性を抑えこもうとはしなかった。彼女たちの性格が変えられていたり、聖女のように本性が清められて、夫をひきつけたいと願う欲望や嫉妬、そして情熱などを失っていくことは、彼の好むところではなかった。彼は非常に細やかなやさしい気持を持っていた。あるとき、新しい花嫁が嫁いでくることになっていたが、その美しさに気をもんだ夫人たちは、策をねり、花嫁に、花婿の預言者がやって来たら“アウーズビッラーヒ（注9）（神（アッラー）よ、救い給え）”と祈るようにと忠告を与えた。一途に、気に入られたいと願い、花嫁は教えられたとおりの言葉を述べたが、遠ざけを祈られた預言者は結ばれる前にそのまま彼女を里に帰したのであった……。のちにその真相を知ったとき、彼は夫人たちのことをこう言って苦笑したという。

「全くヨセフのときの婦人（注10）のようだ……彼女たちの悪たくみはすごいものだ！」

これが預言者の夫人たちの姿である。これらの夫人たちが預言者として信頼を寄せ、勇者として敬愛し、夫として愛し、またその栄光ある生涯とともに力を添えてきた偉人、そのムハンマドの人間味を読者の皆さんがここで読みとって下さることを願っている。

（注6）

アリーはファーティマの亡き後に、何人もの妻を迎えた。

（注7）

アラブのイスラーム以前、すなわちムハンマドに天啓が下される以前の時代をさす。

(注8)

サハーバと呼ばれている。預言者と同時代に生き、預言者と面識をもった信徒たちのことで、オマルやアブーバクルをはじめ、初期にイスラームの発展に貢献した人びとである。

(注9)

“神よ、救い給え”の意味であるが、普通、悪（悪魔）の遠ざけを願う言葉である。

(注10)

クルアーン（ユースフ章）および旧約聖書（創世記）のヨセフの物語を参照のこと。ヨセフを誘惑した女主人のことをさしているのであろう。

第2章

【ハディージャ・ビント・フワイリドーその1】

辛い思い出

少年は、立派な若者に成長した。当時では、ハーシム家の彼のような若者たちには楽しい人生が約束されていたはずなのに、彼は遠い昔の記憶を呼び起すたびに、人生の苦さを感じしみと味わうのであった。

その記憶は、たえずよみがえっては、18年もの年月を引き戻すのであった。

……マッカとヤスリブの間、荒涼とした砂漠の一地点で、母アーミナの前に残された自分を思い出す……。

母の身体から、徐々に徐々に離れていく生命、そして、それは永遠に消えてしまった。

18年という月日はたっても、いまだに辛い思い出であった。アルアブワーのこの大切な母の遺体を埋めた墓の上につ伏して、身を投げかけている自分の姿が、今も目にうつるのであった。それは悲しみに打ちひしがれた自分の姿であった。

遺体が埋められ、土が盛られた後には、母をあいま見ることも、求めることもできず、孤独な冷たい暗い闇が戻ってくるだけであった。

生活の諸々の用事に追われて、時には悲しみを忘れることもあったかもしれない。また人生のめまぐるしい動きがその最愛の人を奪った不幸を片時彼に忘れさせたかもしれない。しかしすぐにまた、その悲しみは戻ってきて、遠い昔の日々を思い返して胸を打つのであった。北に向かう道、砂漠に眠る母の墳墓に通じる道を、悲しみの重さに疲れ果てながら戻る所以であった。

マッカにある今は空家となって荒れはててしまった生家、自分と母が、昔住んだことのあるその家の前を、幾度となく通り過ぎてみたことであろう。

また、マッカの郊外まで、家畜を追って何度も出かけたことがあったが、その度に、夕

暮どき、家路に向かう時刻になると、マッカの町の入り口に立ちどまっては、自分が最初のヤスリブへの旅から帰ってきた時のことを思い出すのであった。

一人ぼっちで淋しく、しかも孤児という身の上になって、女中のバラカの後を黙って従って歩いたときのことを……。

バラカは彼を連れて、祖父の家、アブドルムッターリブのもとに急いだのであった。

心やさしい祖父は、両親を失ったこの幼い孫の傷ついた心を慰めようと、まる2年の間、手をさしのべて、できる限りの努力を重ねてきた。しかし父を奪い、母を奪って少年の心を痛めつけた別れの運命は、またもやハーシム家の人々のもとに訪れた。別れの運命は、彼らの大黒柱であるアブドルムッターリブの床にやって来て、その旅立ちを告げたのである。

少年は、またもや悲しい境遇に出会ったのである。実父亡きあと、父となってくれた人のいま消えようとする生命を見つめていた。

恐ろしく悲しいなかで、少年は息をひきとる寸前の祖父の声に耳を傾けていた……。祖父は、アブターリブ（注1）を枕もとに呼び、少年ムハンマドのことを頼み、そして逝った……。

少年はその後、新しい家に移った。おじのアブターリブが、少年の3番目の父となって世話をしてくれることになったが、いつまでたっても、少年の心は、母の眠るアルアブワーにひかれるのであった。

ハーシム家の少年たちの遊び騒ぐ声を聞いても、砂漠の中で、彼の耳に、心にこだましたあの恐ろしい響きの音を消し去ることはできなかつたし、また、マッカの聖地をめぐる集まる人びとのにぎやかな生活を眺めても、アルアブワーからほど近いところで、目の前に母の死をみた時の辛い思い出を消し去ることはできなかつた。

彼は夕暮時の砂漠にぼんやりと立ち向かった。孤独の静けさに暮色がまわりを取りまくと、そのなかに深い沈黙が悲しく息づいているのを感じるのであった。薄やみが拡がると、気をとり直して彼はおじの家に帰るのであった。しかしそこにも確かな別れの到来を感じていた彼であった。

そして、ついにこの家を出るときがきた。彼はここで十数年を過ごしたのであったが、多くの子供たちをかかえていたおじには、それ以上彼の面倒をみることは不可能になったのである。

しかし彼は何処（いずこ）へ行かんとするのであろうか？

とりあえずシリアへ向かうことになった。

それはちょうどある朝、陽の登るころであった。好い仕事になる旅の話を持ちかけて、おじが次のように言ったからである。

「甥（おい）よ、私は貧しい男だ、きびしい年が続いた辛い年月であった。我々には金もなければ商いをする物品もないが、クライシュの隊商はすでにシリアへ出発の準備ができている。ちょうどハディージャが彼女の商いをうけもって利益をあげてくれる人を捜している。もし、おまえが申し出れば、誠実な人物として知られているおまえのことだ、彼女は他の誰よりもおまえを望むことであろう。おまえがシリアへ行くことについては、私はユダヤ人が危害（注2）を加えはしないかと気になるのだが……。彼女は誰かを2バクル（注3）で雇ったと聞いている。もちろんおまえにも同額を与えるのなら私は不満であるが……。よければ私が彼女に話をしてみようか」

ムハンマドは、ぜひそうしてほしいと望んだ。

おじアブターリブが、ハディージャに話をし、ムハンマドの出発が決まったのであろうか、いよいよ彼は旅立つことになったのである。これとってはっきりとしたあてのない将来を神（アッラー）に委ねて……。

（注1）

アブターリブとムハンマドの父、アブドッラーとは、父をも母をも同じくする兄弟である。

（注2）

イブン・イスハークの使徒伝によると、ムハンマドがまだ少年だったころ、アブターリブはシリアへの旅に彼を連れていった。このとき、バヒーラという名のキリスト教の修道士から、この少年をユダヤ人から守るようにと注意を受け、この少年の将来には何か偉大なことがあると予言された。

（注3）

バクルは若く壮健なラクダ一頭といわれる。

【ハディージャ・ビント・フワイリドーその2】

逢瀬

ムハンマドがシリアへの夏の旅からの帰途であった。隊商はマッカへと急ぎ、歩を進めていた。ラクダひきのホダー（注4）の歌う声は、ラクダに安らぎと、うるおいを与えていた。旅人たちはまもなく会える家族や、愛人との再会の喜びを思いながら、その歌声に慰められるのであった。

マッカにほど近い、ザハラーンまで来ると、旅人たちは彼らの帰りをひたすらに待ちこがれて、呼んでいるように見えはじめたマッカの町を望み見てははしゃいでいた。

しかし、これらの人びとの中で、ムハンマドだけは、マッカに帰る道すがら、アルアブワーの近くを通過した際の悲しみに気が重く沈んでいた。

お供のマイサラ少年は、さかんに急いでマッカに進もうと彼を促していた。彼にシリア

への商いをまかせ、なおかつ以前に雇った人びとの倍の報酬を支払うことを約束してくれた心やさしい女主人が、そこに待っていることを、そして、その報酬の高さを何度も話してみたが、無駄であった。

そのお供の少年は言った。

「では私は一足先にご主人のもとに急ぎ、あなたが成したこの利益のことを知らせましょう」

そして想いに沈むムハンマドを残し、駆け去っていった。

これがシリアから帰る旅人を待っていてくれる総てなのか。ホダーはひらすら愛する人びととの再会を歌って旅人たちを慰めている……。

彼はあとを振り返って、母アーミナの面影を求めたが、ただ砂漠に空しさが広がってくるだけであった。

初めての旅、母を失って、ひとりヤスリブからマッカに戻ったときの旅を思い出すのであった。

無事にラクダがマッカの地に足をおろすと、そこには旅から戻った人びと、また迎える人びとのざわめきが立ちあがっていた。ムハンマドは、カアバ（カアバ神殿）を回ると、そのままハディージャ邸に向けてラクダを進めて行った。

ハディージャは、いくらか気をもんだように、落ち着かない様子で外をみつめていた。そばではマイサラ少年がムハンマドとの旅の話の夢中でしゃべりつづけていた。とうとう彼の気品高い姿が近づいて来るのを見つけたハディージャは、すぐ門まで迎えて、優しいいたわりに満ちた声で、無事の帰国を祝したのであった。

感謝をこめて顔をあげたムハンマドは、目を合わせるとうつむき、目を伏せて、道中のこと、商いのこと、シリアから持ち帰った収穫のことなど報告した。

彼女は魅せられたように、ただ茫然として話を聞いていた。彼が去ると、ハディージャは、その場に立ちつくしたまま、じっとその姿が消えるまで見送っていた。

ムハンマドはおじのアブターリブの家に向かった。ユダヤ人からの危害を受けることもなく、無事に戻った甥（おい）を喜び、安堵（あんど）したおじの姿がそこにあった。

(注4)

砂漠を旅するキャラバンの先頭に行くラクダひきのこと、彼らはラクダの歩調に合ったリズムで、さまざまな主題を盛り込んだ歌をうたってラクダや旅人を旅の疲れから慰めていた。

【ハディース・ビント・フワイリドーその3】

幸福な結婚

マッカでは、月日が忙しく過ぎていった。財物を所有する者たちは、儲けや損失の精算に余念がなく、商人たちは家庭に戻って、危険も多かった長い旅の疲れをいやしていた。

精算が済むと、所有者と商人の間の縁は切れていったが、おそらくハディースとムハンマドの間には、二人を結んだきずなが残っていたのであろう。

ハディースは、すでに世の経験も深く、男性を見る目もできていた。以前に二度結婚をした経験があった。二人ともアラブの立派な家柄の男性であり、一人はアティーク・イブン・アーイズ・アルマフズミー、もう一人はアブーハーラ・イブン・ズラーラ・アッタミーであった。そして商いを依頼して中年の男性、若い青年と、何人もの男を雇った経験もあった。

しかし今まで一人としてムハンマドのような人に出逢ったことはなかったのである。彼女は想い耽った。旅の話をする彼の深い魅力をたたえた声が耳に響いてくる。生命力に溢れて、気品高く彼女に向かって来るその姿が目には浮かぶのであった。

ハーシム家の青年ムハンマドに逢ったときのことを憶いめぐらしているうちに、彼女は突然、それが重大な問題であることに気づいて、その感情に怖くなり、震え、うなだれて自分の気持ちに問いかけるのであった。

「すでに遠のいてしまった青年、遠のいていく青年に、どうしてこんなに心を奪われるのだろうか。恋をしたのであろうか。恋の心が長い眠りののちに目を覚ましたのであろうか」

男性との生活を離れていらい、自然のなりゆきのように一人暮らしの生活を続けていた彼女は、心の返答に出合って、この感情をどうすればよいのかわからず、ただ怖くなってうろたえるのであった。

クライシュ族の由緒ある家柄の男性たち、マッカの金持階級からの再婚の申し込みをすげなく門前払いしてきた彼女がムハンマドに心を奪われたと知った人びとはどうみるであろうか。

おかしいことだ！ 自分はすでに人びとのことを気にしている。ムハンマドの気持ちも知らないうちに……。一体、今日に至るまでマッカの乙女たちや、ハーシム家の花のような娘たちから身を退けている彼が、四十に届いた中年の未亡人の感情に答えてくれるであろうか。恥じらいに似た後悔が彼女を襲った。なんと自分は彼にとって母親にも等しい年ではないか……。

もしアーミナが生きていたら、今でも40歳は越していない年齢であろう！ それに自分はいまだに育児に忙しい母親の身でもある。最初の夫アティークは年頃の娘を一人、二度目の夫アブーハーラはまだ幼い息子を残して逝った……。

そんな想いに悩んでいる彼女の所に、親しい友人のナフィーサが訪ねて来た。うちひしがれて悩みぬいているハディージャの胸のうちを感じとったナフィーサは、事をそんなにむずかしくは考えなかった。クライシュ族のなかでも彼女ほどの評判と家柄をもち、なおかつ富にも美貌にも恵まれた女性はありません、すでに数多くの男性たちが、できることなら彼女との結婚を望んでいるのを知っていたからである。ナフィーサはある決意をかためて彼女のもとを去った。

彼女はムハンマドを訪れたのであった。

「なぜ若いのにこんな淋しい生活をするのですか。いかがでしょう。やさしくいたわってくれる妻を迎えて、ともに暮す気はないですか」ともちかけた。

身寄りのない青年は、6歳の時母を失って以来、味わってきた苦しみを思い起し、こぼれそうになる涙を押えて微笑みを繕って答えた。

「私には、結婚するにも何もありません」

すぐに彼女は話を続けた。

「もしその人が美しくしかもお金持で評判の良い人であったら、それでも考えないの？」耳を傾けようとも思わなかったナフィーサの話がカアバの管理者でもあり、評判のよい人柄の美しい婦人、あのハディージャのことを指しているとわかると、さすがに気にかかってきた。あの人の申し出に答えはないはずがあるだろうか……。しかしあの人が本当に申し出てくれるだろうか。

ナフィーサはムハンマドの心に気になる問題を残して去っていった。彼は、ハディージャの面影を懐かしく思い浮かべてみた。ひとりになったムハンマドのまぶたには、彼女の明るい、優しい微笑みに満ちた表情が浮かんでくるのであった。

クライシュ族の名もあり富もある人びとに対する彼女の返答を知っていた彼は、自分の現実をみつめ、自分のその想いが遠のいていくのを心さびしく感じるのであった。カアバに向かって歩いていると、途中の道で巫女が立ち止まって彼を呼びとめた。

「婚約に来たのですか。ムハンマドよ」

彼はいつわる気持もなく「いや……」と答えた。しばらく考え込んでいた巫女は首を振りながらこう言った。

「どうしてなのですか。神に誓って申しますが、彼女に満足しなければ、クライシュ族のなかに満足できる婦人はいませんよ」

まもなくして、ハディージャからの結婚の申し出があった。早速それに答えてムハンマドは、アブターリブとハムザの二人のおじに付き添われて、ハディージャのもとに向かったのだった。

ハディージャ邸では人びとが集まって花婿を待ち受けていた。急ごしらえの婚礼の準備は、すべてそろっていた。おじのアブターリブはこう話しはじめた。

「ムハンマドはクライシュ族のどの青年よりも優れた人物である。人格、気だて、ふるまい、そして知性、彼と比較する青年は他にありません。金銭的には恵まれていないかもし

れないが、富というものはやがて消えてゆくものにすぎない。彼にはハディージャと結ばれたいという意志があり、それはハディージャも同様である……」

ハディージャのおじアムル・イブン・アサドは彼をほめたたえて、20バクルのサダーク（結納金）で二人の結婚を認めた。

婚姻の契りが終るとザバハ（注5）が始められ、タンバリンが鳴った。ハディージャ邸は人びとや友人たちのために開放された。つめかけた人びとの中には、ムハンマドを育てた乳母でそのめでたい姿をひと目見ようと、サアド部族のベドウィン部落からやって来たハリーマもいた。翌朝、ハリーマの出発の際には、40頭の羊が愛する夫ムハンマドを育ててくれた人への花嫁ハディージャからのお礼として贈られた。

ムハンマドの目には光るものがあった。母アーミナを失っていたムハンマドは、今や手許に優しく過去の痛手をいやしてくれる人を得たのである。長かった苦しみにとってかわる美しいものを彼はハディージャのなかに見るのであった。

この幸せな夫婦の誕生をマッカではただムハンマド・イブン・アブドッラーとハディージャ・ビント・フワイリドの二人が結ばれたという程度で、とくに関心を示した様子はない。

しかし15年の後にこの結婚の日を、歴史が栄光の日々のなかに記録するのである。ある時は、この夫婦にマッカの人びともうらやむ幸福な生活を、後世にも言い伝えられるような美しく清らかな日々を残してくれた。この幸せに浸った二人の15年に、神（アッラー）はより完全な幸福を授けてくれた。二人は息子たちと娘たちに恵まれた。アルカーシム、アブドッラー、ザイナブ、ルカイヤ、ウンムクルスーム、そしてファーティマと。

この間、時は寛いだ平和な生活をふたりに与えてくれた。過去の身よりのない日々の辛い思い出に代わって、優しく湧き出る愛の泉が、ムハンマドに潤いを与えてくれた。しかしそれはまた、重い荷を背負って厳しい戦いを迎えねばならぬ明日のために、つけ加えられた序幕の日々でもあったのである。

すでにこの時期に二人は最愛の息子たちを失うむごい運命に出会っていたが、この運命はすべての人々が飲まねばならぬ苦い杯であり、二人の子供たちは神（アッラー）から預けられたものにすぎず、いつかはその運命のもとに返すべきものであると、二人は愛と忍耐でその悲しみに耐えたのである。

（注5）

羊などの動物をイスラーム法に従って屠殺することである。

【ハディース・ビント・フワイリドーその4】

啓示

やがて重大な出来事が起ってくる。この出来事は、この平和な家庭のみならず、クライシュ族やアラブ民族のみならず、全人類の上に起きた重大事であった。ムハンマドが神（アッラー）の啓示を受けたのである。ムハンマドに重い荷を投げかけた警告であった。彼は人びとの中に警告者として遣わされたのである。

啓示は新しい生命の知らせであった。困難な前途の宣告でもあった。圧迫に会い、迫害を受けて始まり、戦い抜き、やがて勝利が訪れる……。

事実、この大きな出来事が、突如としてアラブ民族に起ったわけではなかった。アラビア半島では、すでに待たれている新しい預言者の到来を予告する知らせがあちらこちらに伝わっていたし、到来しつつある神（アッラー）の福音について語る人びとや祭主は多かった。

特にマッカは巡礼の聖地であり、遠い昔から信仰の中心となっているカアバをめぐる、そのような人びとが好んで集まる場所であった。

同じように、この重大な出来事は、ムハンマドの上に突如起きたわけではなかった。良き妻の理解のもとに、生活が安定して経済的にも恵まれると、彼はひとり瞑想に耽り、静かに物事を考え込むようになっていた。それは昔、少年のころから彼のうちにみられた傾向でもあった。羊を追っていた日々、ひまな時に好んで彼がそうして過ごした……そして、日々の生活に追われて遠ざかっていたものが、新しくまた根強い本性のように、あたかも彼の本来の彼の一部であるかのように現れたのであった。

しばしば彼はカアバについて考えた。特にカアバにまつわる出来事は、マッカの歴史をまた彼の家系の歩みを生み出したものであり、また父アブドッラーとアラブの先祖イスマイルとの間は、何世紀もの長い年代を越えて結ばれているのであった。アブドッラーの犠牲の話は、最初の犠牲の物語の、あの遠い昔のイブラーヒームの息子の記憶をしのばせるものであった。

真理の光が彼に訪れる時が来た。カアバに集められたこの偶像神群、聞きもしない、見もしない、善きも悪しきもなさないこれらの偶像を、彼は否定した。石像に愚劣な祈りを捧げ、自分たちの手で造った邪教の像に供物を捧げては、自分たちを守る神としているこの民の、そのあさはかな知性を心苦しく思うのだ。

深い瞑想に耽った彼は、秘中に偏在する非常に繊細なものを知った。夜の闇の向うに閃くもの、砂漠の権威のうしろ、光の明るさの向う、大空のその向うに君臨するもの、その偉大な力が、この宇宙を精密に統制された理法として握っているのを……太陽は月に追いつくことはなく、夜は昼に先んずることはなく、すべてが軌道にのって動いている……と。

40歳に達するころになると、彼はヒラーの洞窟に籠り、偉大な真理の力、秘中の力に導かれるように感じながら、精神の修業に孤独な時を過ごすのであった。年も経て、人間としても、母親としても完成されていたハディージャは、時おり彼女から離れていくこの孤独な夫の瞑想生活に悩むことはなかった。むしろ純粋な瞑想を妨げることをしないよう心がけていた。そして家庭ではひたすらやさしく気を遣って夫に尽すのだった。ヒラーの洞窟に籠る時には、遠くから心を配り、おそらく彼のあとに人を送って身に危険のないようにと見守らせていたことであろう。

このように、天啓を授かるすべての準備が整い始めていた。しかしこの万端な準備にも反して、啓示が降りた時には、やがて現れる預言者の知らせが行き渡っていたこの地は、大揺れに揺れ動いたのであった。

ムハンマド・イブン・アブドラー。絶対にカアバの偶像神崇拝に満足せず、必ずいつかは無知なこの民の生活が変えられる時が来ると信じていた。その約束された預言者なる人をもふるえあがらせたのであった。

ヒラーの洞窟に坐っていた彼は、啓示が降るや、薄暗い夜明けのなかを、怖れおののきながらまっ青になって家路を求めて駆けた。妻ハディージャの部屋にたどり着き、やっと救われたかのように安堵した彼は、ふるえる声で一部始終の出来事を伝え、自分の恐怖を吐き出すように彼女に救いを求めるのだった。

一体、夢を見て、戯言（たわごと）を言っているのか、それとも気が触れたのか？

ハディージャは夫を胸に抱きかかえた。おののき苦悩している夫の姿を見て、彼女の胸の中には深い母性の感情があふれた。

彼女は力強く、きっぱりと言った。

「神（アッラー）はきっと守ってくださることでしょう。お喜びなさい。そしてしっかりなさって下さい。ハディージャは神（アッラー）に誓って叫びます。あなたがこの民族の預言者となられることを望みます。神（アッラー）はけっしてあなたをお見離しにはなりません。あなたは人びとと深い愛で結ばれている人、けっして偽りを言わない人、あわれな人を助け、客人を大切にし、正しい真理をかかげる人なのですもの……」

恐れは消えた。夢を見ているのでもなければ、気が触れたのでもなかった。ハディージャの優しい声が朝の光とともに彼の心にさし込み、確かな自信と安らかさを与えてくれた。彼は安らぎを覚えた。

彼女は夫を床に誘うと、まるで母親が大切な息子を寝かしつけるように休ませ、安らかな眠りに落ちた彼をしばらくの間見守っていた。慈しみと、尊敬の念に満ちた彼女の愛の心が、そんな彼の周囲をとりまいているかのようにであった。やがて立ち上がると、静かに部屋を抜けたハディージャは、人気のない道を従兄（いとこ）のワラカ・イブン・ナウフェル（注6）のもとに急いだ。

マッカの街は、まだ朝の眠りにおちていた。やがてすべてが朝の光に、その一日を開き始めようとしていた。

ハディースが訪れると、年老いた身体を横たえたままに彼女を迎えたワラカは、彼女の話聞くやいなや、全身を強く震わせた。弱りきった彼の体に生き生きとした力が湧きあがってきたかのように力をこめて、熱っぽく叫んだ。

「聖なるかな、聖なるかな、ワラカは神（アッラー）に誓って言います。もし本当なら、ハディースよ、ムーサー（モーゼ）やイーサー（イエス）に現れた大天使が彼に訪れたのだ。彼こそ、この民族の預言者なのだ。彼に恐れなくてしっかりするよう伝えなさい」

ハディースはそれ以上言葉を待たず、それ以上何も言えず、その喜びを伝えようと、愛する夫のもとへとんで帰ったのである。

夫の眠りを妨げたくなかったハディースはそのそばに腰をかけて、安眠している夫をやさしく見つめていた。

突然、床のなかからとび起きたムハンマドは、額を汗でびしょりさせながら、苦しうにもがいた。やがて静かな落ち着きを取り戻した彼は、まるで姿なき者の声を耳にしているかのようにであった。そしてゆっくり投げかけられた言葉を復習するかのようにつぶやいた。

「外衣にくるまった者よ、起き上がって警告せよ、汝の主を讃えまつれ、汝の衣を浄（きよ）めよ、罪をおかすことをさけよ、より多くを得ようとしてほどこしをしてはならぬ。汝の主（アッラー）のため、堪え忍べよ」……クルアーン第74章（アルムッダシル）1～7節。

ハディースは夫を抱きかかえると、ワラカの言葉を伝えた。感謝の心で妻をみつめるムハンマドであった。彼の生涯を、愛と希望と平和で満たしてくれたその人を、じっとみつめる彼の瞳は、溢れでる感激がいっぱいであった。

視線を移して床をみつめると、心を打たれた者のように彼はこう言った。

「ハディースよ、眠りの時代は終わった。大天使（ジブリール）が私に人びとへの警告と神（アッラー）への信仰を呼びかけるよう命じたのだ……。しかし私が呼びかけたとして、誰が答えてくれるであろうか」

「私が答えます。ムハンマドよ、どうぞ、どの人びとに呼びかけるよりも先に、私に教えを説いて下さい。私はあなたのムスリマ（注11）です。あなたの啓示を信じ、あなたの神（アッラー）を信じます」

彼女は、情熱をこめてこう答えたのである。愛妻を祝福し、静かな心の安らぎを取り戻したムハンマドは、彼女の勧めに従って、ワラカに会いに出かけた。

ワラカは近づいて来るムハンマドを見て叫んだ。

「神（アッラー）に誓って申します。あなたはこの民族の預言者です。うそつき呼ばわりされ、迫害され、追い出され、はては戦いもいどまれるであろうが、もし私がその日まで生き長らえることができたなら、私は神（アッラー）が告げられたことを守って、全力を尽して必ずお助けいたしましょう！」

そして、顔を寄せて額に口づけをした。

ムハンマドは聞き返した。
「人びとが私を追い出すのですか」

ワラカは答えた。
「その通り、敵を持たずにきた男（預言者）はいなかった。私は若くなりたい。私は生きていたい！」……と。

ムハンマドの心から疑惑の霧がとけ、ワラカの言葉に確信を得た彼は、イスラームの布教のためには、どのような圧迫や迫害にも立ち向かおうと、聖戦の決意をかためつつ、家路に戻るのであった。いうまでもなく、クライシュ族の人々は、彼らの信仰が非難され、先祖から彼らの神々として奉ってきたものを、さげすまされることを、こころよく思わなかった。

夫、選ばれたる預言者を信じて、忠実な妻は何年にもわたる迫害の受難をともに耐えながら、常に励ましと協力を惜しまなかった。ムハンマド一族との絶縁を記した文書をカアバにかかげて、クライシュ族が許されぬ戦いを布告したのちには、一家はアブータリブ山麓へ逃れざるを得なかった。

ハディージャ夫人はなんのためらいもなく、夫に従ってマッカを去った。幼少の頃から親しんで、思い出のたくさん残るその住みなれた館も捨て去って、夫であり預言者である人のため、断固立ち上がったのである。すでに彼女の齢（よわい）は高く、年老いた身に迫害の重荷を受けて身体は弱まっていた。

アブータリブの山麓にのがれて3年、夫や夫に同調する人びととともに、苦難の日々を耐えしのびつつ、60歳を過ぎてめっきり衰えた身体にむち打ちながらも、彼女は懸命に生きようとした。ひたすら夫を守り、孤立したその戦いを、ともに戦いぬくためである。

この戦いは、武器を持たないわずかな味方に、根強い邪教の圧力と、数知れない有力なクライシュ勢を相手取っての戦いであった。

（注6）

キリスト教徒。ユダヤ教やキリスト教の聖書に深い知識をもち、ムハンマドにかなりの影響を与えた人であるといわれている。

（注11）

神（アッラー）への帰依者。すなわちイスラーム教徒のことであり、女の信徒をムスリマ、男の信徒をムスリムという。

【ハディース・ビント・フワイリド-その5】

悲しみの年

その固い信仰の前に抵抗もおれて、ムハンマドが、マッカに戻るときがきた。しかし、ともに苦難の歳月を生きぬいてきたハディースは家に戻るとそのまま床に伏してしまった。彼女は弱っていた。迫害につぐ迫害に疲れきっていた65歳の彼女には昔の力はもう残っていなかった。

三日間、身を横たえたままであった。夫は彼女のそばを離れず勇気づけ、看護を続けたが、この世では、またと逢うことのない別れのときが近づいていた。彼女は初めて会ったそのときから、愛し続けてきた人、啓示が下されてからは、信仰を捧げて、最後の最後までともに戦い尽くした人、その人に見とられつつ、安らかな永遠の眠りについたのであった。

ムハンマドは、あたりを見回してみた。

ハディースのいなくなった家は、淋しい空家のようにであった。マッカは、彼女のいないいま、そこはもう自分の住むところではないように思えてきた。

イブン・イスハークは言った。

「このハディースの死という不幸は、使徒を深い悲しみのなかにつき落とすとした。彼女はイスラームにおいては、使徒の信頼を寄せる宰相ともいえる役割を果たしていた人であった」

悲しみの年といわれるこのハディース夫人の死去の年には、今までにない激しい迫害が襲ってきた。敵の異教徒たちは、ムハンマドの身に起きたこの不幸の暗い影に、再び光の射すことはないであろうとみてとった。彼らはそんな自分たちの思いに惑わされ、すぐにも彼を打ち負かせるものと、極端な行動に出た。曙の寸前の闇の頂点を知らなかった。

ハディース夫人は逝った。しかし忠実な精霊（天使）がいつも使徒とともにいて、くじけることのないよう彼を守っていた。初期から帰依した信徒たちも、ともに預言者を守り、勇敢な人びとは身も心も献げて、イスラームの栄光と勝利のため、死をいとわぬ覚悟であった。

最初の妻であり、良き片腕であったその人は、死んだ。しかしイスラームの教えはすでにマッカを越えて、ヒジャーズ地方の全域に及び、またその背後のアラビア半島の隅々に広まっていったのである。

イスラームは、やがて一部の教友たちによって、砂漠を越え、海を渡り、ハバシヤ（今のエチオピア地方）まで伝えられたが、これらの人たちは、かたく忍耐強く信仰を守りながら、家を捨て、家族と離れて半島の外へと脱出して行った人びとである。聖戦の道に勇敢に身を献げてきた彼らの興奮するような物語は、聞く人びとの心に深い感動を与えるのであった。

ハディース夫人は死んだ。しかし、ほどなくマッカ巡礼のあのとき（注7）、ヤスリ

ブ（のちのマディーナ）の人びとがアカバの地で預言者を承認し、忠誠を誓って帰り、マディーナ全土をあげて彼を迎え入れる準備をととのえた。彼らは勝利の日に向かって、神（アッラー）とその使徒の道を全うする名誉の死に向かって預言者とともに戦う決意であった。

（注7）

ヤスリブから巡礼のためマッカを訪れた人びとが、マッカ郊外のアカバの地で預言者と会見し、その教えに従うことを誓った。621年と622年のことである。

【ハディース・ビント・フワイリド-その6】

永遠のハディース

ハディース夫人は、本当に死んだのであろうか？

彼女はいつも夫の心のなかに生きていた。彼女の分身は常に夫とともに歩み、彼の周囲から暗い闇をとり払うのであった。

その後ムハンマドは、何人もの妻を迎えるわけであるが、彼の心のなかに占める彼女の存在は、生涯永遠に初めての妻、4分の1世紀もの間二人だけの生活を築いてきた愛する人として、他の誰一人としてゆるがすことのできない地位を保っていた。

やがて彼女のあとに数多くの夫人たちが嫁いできた。

なかには、若く美しい妻や、誉れ高い妻もいた。しかし、彼女たちの誰一人として、ハディース夫人のその地位を奪うことはできなかった。彼女の幻は、永遠に夫の心に生きていた。そしてその面影を夫から遠ざけることは誰にもできなかった。

何年かの後、バドルの戦いの勝利がもたらされたとき（注8）、マディーナでは、クライシュ軍の捕虜たちの償還がおこなわれたが、その際、預言者の娘ザイナブが捕虜となった夫（注9）のアブールアース・イブン・アッラビーウの身代品として差し出した母親ハディースのネックレスを見た父、預言者の心は悲痛な憐れみの感情にふるえ、ザイナブの手もとにネックレスを返し、彼女の捕虜を放すよう、教友たちに頼むのだった。

また幼い妻として預言者に嫁いだアーイシャは、預言者の深い愛を一身に受けていたにもかかわらず、自分より先に夫の心に住み、ただ一人の妻として最期の日まで夫を独占していたハディースその人、しかも死後にも夫の心に生きているその彼女に、非常な嫉妬の感情をいだくのだった。

ハディージャの姉妹のハーラがマディーナを訪れたとき、中庭で彼女の声を聞いたムハンマドが、あまりにも亡き人の声に似ているので「ああハーラよ」と深いため息をついたという。そのときアーイシャは、感情を押えきれずこう言った。

「クライシュ族のお年寄りのなかから、お年寄りを思い出すのはおやめなさい。赤い口もとが色あせてしまったような……。神（アッラー）はかわりにもっと良い者をお与えになったでしょうに」

表情を変えたムハンマドは、アーイシャにこう答えた。

「神（アッラー）にかけて、神（アッラー）は彼女以上の人を与えてはくださらなかった。人びとが背（そむ）いたときには忠実に私に従い、人びとが偽り者呼ばわりしたときにも、あの人は私を信じ続けた。人びとが拒絶したとき、あの人は私にすべてを投げ出してくれた。そして神（アッラー）は彼女だけから子供を私に授けて下さった……」

アーイシャは口をつぐんだ。心では、
「今後、私は絶対に彼女のことは考えまい」
と思った。

それ以前、アーイシャは、ハディージャについて絶えずいろいろと言っていた。ある日も、彼女をしのんでいる夫を見てこう言ったことがあった。

「まるでこの世にハディージャ以外に女性がいないみたい！」

すると夫ムハンマドはこう答えた。

「そうだ彼女は……だったし……だったし、その上に彼女からのみ子供を授かったのだ……」と。

また、神（アッラー）の使徒が羊をザバハしたとき、「ハディージャの友人たちに送きなさい」と言った。

それに関してアーイシャが何か言ったことがあったが、彼はこう言った。

「私は、彼女の愛した人びとが好きなのだ……」

このように何度もアーイシャは、神（アッラー）の使徒が彼女について語るのを耳にしていた。

「ハディージャはなんとうらやましい女性なのでしょう。私は彼女が亡くなってから後に使徒様と結婚して本当によかった」

そしてまた、

「彼女ほどに嫉妬を覚える夫人はほかにいません。ハディージャのことを夫が思い出しているのを見るたびに、私はとても嫉妬を覚えるのです。彼女が死んで三年経ってから結婚してくれて本当によかった」……と。

ハディージャ夫人が死んでから、マッカ・ファトフ（注10）の日まで、いろいろな出来事があった十数年であった。

我々は、神（アッラー）の使徒が、そのマッカのファトフの榮譽を飾るため、またその宿营地として、そこに天幕を打ち建てるために、ハディージャの眠る墓所の隣を特に選んだことも知っている。ハディージャの分身は、彼を見守り、その後も彼に寄り添っているのであった。彼はカアバを回り、偶像を打ち倒しながら、ときどき懐かしい妻の住み家をふり仰いだ。そこは、長かった戦いの日々、ムハンマドを力づけ励まし続けてくれたその人の愛と慈しみの泉があふれ出る所であった。

ハディージャに続いて、それこそ数知れぬ女性たちがイスラームに入信するのだが、預言者の生涯に重大な役割を全うするため、神（アッラー）が選ばれた最初のムスリマとして、彼女は一人特別の存在とされたのである。

歴史家たちは、ムスリム（注11）であろうと非ムスリムであろうと彼女のその役割について認めている。ボドレー（R. V. E. Bodley）はこう述べている。「愛したゆえに結婚した夫に捧げた彼女の信仰こそ、今日その信者が世界の人々の7人に1人と数えられるほどになったイスラームの、その初期の時点での信仰を支えたものなのであった」

マルゴリウス（D. S. Margoliouth）はムハンマドの伝記を書くにあたって、ハディージャに会ったその日、彼女が手をさしのべたその日に使徒の生涯の始まりをみ、ハディージャの死んだ日、マッカにハディージャが消えた日をもって、ヤスリブへのヒジュラ（移住）の出来事を語っている。

デルマンゲム（Emile Dermenghem）は、ヒラーの洞窟から、恐れおののきながら異様な目つきで戻った夫を迎えたときのハディージャを、「落ち着きとやすらぎを与えた人、深い愛情と信頼を寄せ、母のように優しく夫を胸にかかえ、そこにどんな敵からも彼を守ってくれる大きな母の慈しみを見る」と記している。

また、彼女の死については、「ムハンマドは、最初の帰依者であり、彼の心にやすらぎを与えてくれた人、妻としての愛と、母の優しさを投げかけてくれたハディージャを失った」と書いている。

デルマンゲムは、ここで金持の未亡人との結婚について語る際に、多くの学者たちが気づかなかった点、孤児として育った青年にとっての母性愛の重要性に触れている。

一方、マルゴリウスは、ハディージャの資産を、この結婚の第一の成因とみなし、「貧しい青年と二人の夫に死にわかれてかなりの財産を受けついで中年の未亡人を結んだもの」と述べた。

なお彼は毒のある敵意をこめた言葉でつぎのように書き続けている。「ムハンマドのところへハディージャからの申し込みがあったとき、彼が以前おじのアブータリブの娘、ウム・ハーニーとの婚約を願ったときに、おじは貧しいゆえに、娘は金持の男と結婚させたいと答えたことがあったが、そのとき耳に残った言葉を彼は思い起した。貧しいということに劣等意識を持っていたムハンマドは、ハディージャからの申し込みを受けるやいなや、その財力に魅了されて受入れたのであった。それこそ、彼にとって

は貧しさゆえの傷をいやし、名誉を得るすべであった」

このマルゴリウスのハディージャの資産がムハンマドをひきつけ、年齢の差を越えさせたとする見解は誤りである。ムハンマドをひきつけたものは、彼女の人柄、性格の美しさ、優しさであった。二人の間の年齢の差の問題を語るには、6歳の幼いときに母の愛情を失っていらい辛い日々を送ってきた彼に、ただ一つの必要であったものが母の愛であるということに尽きるであろう。

マルゴリウスのこの発言よりも、もっとおかしなミュワー (William Muir) の言葉がある。「ムハンマドのハディージャへの忠誠の裏には彼女の経済力、社会的地位に対する恐れがあり、彼女から離婚されることを恐れたゆえである」

ではミュワーはつぎの点を我々に説明すべきである。

なぜハディージャの亡きあとまで、彼女への忠誠は続いていたのか。本当に神（アッラー）の使徒が、彼女から離婚されるのを恐れていたのか。彼はアーイシャと、彼女のことで死後何年も経っているのになおも争ってその思い出に他人が触れることを好まなかったのはなぜか。

事実、ハディージャは、生きていても亡くなったあとも、預言者の生涯を充実させてくれる存在であった。

アーイシャが「まるでこの世の中にハディージャ以外に女がないみない」と不満を述べたほどである。アーイシャでさえも、その意味ではハディージャを越えることはできなかった。

実際、ハディージャ以外に誰が彼の昔の傷跡……目前で母を亡くしたその心に奥深く残されたその傷をいやすことができたのであろう。瞑想にふける夫のために良き環境を整え、ことごとく神（アッラー）の啓示を授かるべく夫に貢献する貴重な婦人が、いったい彼女のほかにどれだけいたであろう。ヒラーの洞窟から帰宅した際の歴史的な出来事を、彼女が迎え受けたように、落着きと、いたわりと深い信頼を寄せて迎え受ける妻がほかにもいたであろうか。

ハディージャ以外の恵まれた婦人に、信じる真理のため、迫害を受ける夫を励まし、またその迫害の時期を夫とともに耐えるため、慣れ親しんだ平和な生活、豊かな生活を快く捨て去ることができるであろうか。とうてい出来ないであろう。そればかりでなく、孤児の身には母となり、英雄の身には激励となり、戦士には心の安らぎを与える人、また預言者には宰相となって、約束されたその人間の生涯を充実させるために、運命は彼女を準備していたのであった。

イブン・イスハークは言った。

「神（アッラー）の使徒に人々が反発的なことばを投げたり、偽り者呼ばわりして彼を悲しませるたびに、神（アッラー）はハディージャをしてそれを慰める。ハディージャは辛い気持で帰宅した夫をいたわり、勇気づけ、深い信頼を寄せてそんな問題を和らげては、死に至るまで彼に尽した」

「神（アッラー）の使徒であり、また父親であったムハンマドの生涯を満たし、イスラーム

ム史を充実させてくれた4人の娘たちを残して、彼女は逝った……」

すでに娘たちについては、私の著書『預言者の娘たち』で言及したが、そこにはハディースが最初の信徒の母と呼ばれるに全くふさわしい美しい母親像が説明されている。

一方、預言者の養子となっていた彼女の前夫の息子、ヒンド・イブン・アブー・ハーラに関しては、彼はウフドの戦いに活躍し、またバドルの戦いにも参加していたと言われている。

また同じように、駱駝の戦いの際にも、アリーを助けて戦ったと言われている。人びとの伝える話では、彼はそのときに戦死したとも、あるいはバスラでペストにかかり、死んだとも聞いているが、彼の葬儀には、人びとは自分たちの親族の葬儀を置きざりにしてまでも「預言者の娘のファーティマの兄が死んだ……」と騒ぎながら集まってきたと伝えられている。

(注8)

西暦624年のことである。マディーナ軍（イスラーム教徒）対マッカ軍（多神教徒）の最初の合戦であった。

(注9)

当時ムハンマドの娘、ザイナブの夫はマッカの多神教徒であった。

(注10)

630年。ムハンマドによるマッカ征服（マッカ開放）のことである。

(注11)

神（アッラー）への帰依者。すなわちイスラーム教徒のことであり、女の信徒をムスリマ、男の信徒をムスリムという。

第3章

【サウダ・ビント・ザムア-その1】

侘（わび）しさ

毎日が重苦しく過ぎていった。布教のために、戦いにあけくれる日は、彼には重くのしかかっている重荷を運んでいるような毎日であった。母であり主婦であり、イスラームの宰相であり、戦う彼の片腕であった妻ハディージャを失った後の一人暮らしのムハンマドは、暗い眠られぬ夜を送りながら、亡き人の思い出に沈むのであった。部族の人びとからの冷たい仕打ちに悩まされるたびに、孤独のなかで、いつも彼の生活を充実させてくれたその人の面影を思い浮かべるのであった。

教友たちは預言者の上に深い悲しみの跡を見ては、その一人暮らしを憂い、再婚をしてくれればと願うのであった。おそらく新しい結婚によって、亡きハディージャにかわって、彼の侘（わび）しさを慰めてくれる人を得ることができるのではないかと願っていた。しかし誰一人として、喪の期間に、再婚の話をうち出す勇気ある者はいなかった。

喪中の期間が過ぎたある晩、ハウラ・ビント・ハキームが預言者のもとにやって来て、同情を寄せてこう言った。

「使徒様よ、あなたがハディージャを亡くして悲しんでいらっしゃる様子が私にもよくわかります」

するとムハンマドは答えた。

「その通り、彼女は子供たちの母であり、我が家の主婦であった」

ハウラは遠く視線を移していたが、再び預言者に向かうと突然に縁談の話を持ち出した。預言者は何も言わなかった。今も亡き人の思い出が生きている心の奥の鼓動にじっと耳を傾けていた。二十数年前、ナフィーサが訪ねて来て、ハディージャとの結婚の話をきり出したときのことを思い出していた。

ハウラにその申し出を断わると、とがめるような気持で、「いったいハディージャのあとに誰がいるだろう」と言った。

ハウラはすぐに、まるでその質問を予期していたかのように答えた。「アーイシャです。あなたの一番愛する友アブーバクルの娘です」

その名を聞いたとき、ムハンマドの心は動いた。アブーバクルとは、アリー、そしてザイドに続いて最も初期に彼を信じてくれた友、常に忠実に深い理解を寄せ、肉親以上に献身的にその身を高価な財物を、惜しみなく投げうって尽してくれた人である。

ムハンマドは、アブーバクルとともに、彼の娘、アーイシャのことを想った。あのかわいらしい少女、長い間持ちまへの明るさ、朗らかさで彼を慰めてくれた愛らしい少女のこ

とを……。

彼には、ハウラの言葉を返すことができなかった。たとえ「否」と答えるつもりでも、彼の舌が彼の思いのままにならなかったであろう。アブーバクルの娘を拒否するなんてできようか。長い間の忠実な友愛が、彼にとっては大切なアブーバクルの立場が、またあのかわいらしい知的で朗らかな幼い少女の愛くるしさが、それを拒んでしまうのであった。

「だが彼女はまだ幼いよ、ハウラ」

しかしハウラの答えは用意できていた。
「今日、婚約を父親に申し込みに行き、そして大人になるまで待ちましょう」

大人になるまで待つとすれば、ムハンマドの家の娘たちや、彼の身のまわりの世話を誰がするのであるか。

そして、ハウラは、何年も先でないと成立しないような、そんな遠い先の話をきり出しにやって来たのであろうか。

いやいや、彼女は二つの縁談を同時に勧めに来たのである。一人は少女アーイシャ・ビント・アブーバクル、そしてもう一人は、未亡人となっていたサウダ・ビント・ザムアであった。

ムハンマドはこの二人との縁談を承諾した。そこでハウラはさっそく、アブーバクルを訪ね、婚約の申し込みを伝えると、そのままザムアの家に向かい、娘サウダの件をこう言って伝えた。

「サウダよ、神（アッラー）からの素晴らしい知らせを持ってきたのです。なんだと思いますか」

サウダは何のことかさっぱりわからなかった。

ムハンマドの結婚の申し込みだと聞いたサウダは、驚きのあまり、しかし気をしっかりと持ちながら震える声で言った。

「それは願ってもないことです。父のところへ行って話して下さい」

ハウラは彼女の父の部屋へ案内された。彼はハッジュ（巡礼）もできぬほどの高齢であった。ハウラはジャーヒリーヤの風習であいさつをかわしてからこう告げた。

「ムハンマド・イブン・アブドッラーが私をサウダとの婚約のために遣わしました」

その老人は叫んだ。

「なんと素晴らしいことか。それで本人の意志は？」

ハウラは答えた。

「それを願っています」

そこで娘を呼び、こう言った。

「サウダよ、この婦人が言うには、ムハンマド・イブン・アブドッラーがおまえとの婚約

のためにこの人を送ったという。それはこの上もないことだ。彼との結婚を望むのか」

「はい」

この一言以外は彼女はなにも言わなかった。そこでザムアはハウラにムハンマドを呼んで来るように頼み、彼女はこの結婚の成立のためにムハンマドを呼びに立ち上がったのであった。

【サウダ・ Bint・ ザムア-その2】

異郷・寡婦の身

預言者が、サウダ・ Bint・ ザムアと婚約したという知らせがマッカの町に行き渡ったとき、人びとは耳を疑った。サウダのような特に目立ってひきつけられるものもない女性との婚約だったからである。若くもなく、美しいともいえぬ寡婦が、あのハディース・ Bint・ フワイリドの後釜になるとは。

貧しく親のない青年ムハンマドが婚約したのは、マッカ屈指の婦人であり、クライシュの男性たちの羨望の的であったハディース夫人であった。その素晴らしい婦人にとって代わる人としてサウダの名はマッカの人びとには考えられなかったのである。

いや、サウダもまた他の夫人たちもハディース夫人にとって代わったわけではなかった。

サウダが使徒の家に嫁いだのは、夫に先立たれた彼女に彼が深く同情し、その身のふり方を憐れんだからであった。サウダの亡き夫という人は、アッサクラーン・イブン・アムルで、彼女にとっては従兄（いとこ）であった。彼女は夫に従ってハバシャに逃れたが、その異郷の地で寡婦の身となってしまった。

一人残された身の上に、未亡人の苦しみと異郷での生活の辛さが負い重なって彼女を襲った。

使徒は、アーミル家の8人の人々が、家を捨て、財産を投げ捨てて、灼熱の砂漠を渡り、海を越え、異教徒たちの激しい迫害からイスラームを守って逃れて行ったのを思い起した。これらの8人は、マーリク・イブン・ザムア（サウダの兄）、アッサクラーン・イブン・アムル（サウダの夫）、そしてアッサクラーンの兄弟であるサリートとハーテブの二人、そしてこの三兄弟にとって甥（おい）にあたるアブドッラー・イブン・スハイルであり、残る三人は彼らに従った妻たちで、サウダ・ Bint・ ザムア、ウンムクルスーム・ Bint・ スハイル、そしてアムラ・ Bint・ アルワクダーンであった。

彼女たちもみな、アーミル家の出身であった。このようにこの敬虔な一族は男も女も一

家をあげて神（アッラー）の道に生きるため、家を捨て、国土を捨て、死よりも厳しい現実

に挑戦していった。

故郷はサウダが長年親しみ、若く楽しい青春の日々を送り、また、年老いては落ち着きと安らぎを得たであろう愛すべき地であったのに、その故郷に別れを告げて、見知らぬ土地で、見知らぬ人びとと、聞き慣れぬ言葉、異なった風俗や習慣、宗教にとり囲まれて暮した彼女の並々ならぬ苦勞を使徒は思いやった。せめて知人や家族の眠っているマッカの地に埋めてほしいとマッカに向かう彼女の夫を故郷は待ってはくれなかった。彼はマッカへの帰途に死んだのであった。

信仰を守りつつ、この異郷での苦難を味わった未亡人に、ムハンマドは強く心を打たれた。だからこそ、ハウラが彼女の名をあげると、その年老いた身をいたわり、厳しかった人生をいたわるために彼女に慈愛の手を差しのべたのである。

【サウダ・ビント・ザムア-その3】

私の夜はアーイシャに譲ります

そしてある日、サウダは神（アッラー）に遣わされたイスラームの預言者の妻となっていた。

栄光に飾られた夫に対して、彼女は畏敬の念から恐れのような感情を抱き、自分をふさわしからぬ者と感じた。自分を最初の夫人、ハディージャにも、また、待たれている幼い花嫁のアーイシャにも、つり合わない身と思ひ、自分の身に起きたこの不思議な幸運な出来事に、足元で大地が揺れ動いているかのように感じていた。

けっして自分の気持ちをいつわっているわけではなかったが、自分の人生の経験から、自分とムハンマドの心の中に、けっして一体となって溶けあうことのできない隔たりを感じとっていた。自分と夫を結んだのは、神（アッラー）の使徒ムハンマドであり、人間味をそのまま残した男性ムハンマドが、彼女を選んで結婚したのではなかったことを彼女は、最初の瞬間からそれを知ったのであった。彼女が神（アッラー）の使徒から受けたこの幸運は憐れみの情からであり、愛の交わりでなかったことは疑いなく確かであった。

しかし彼女にとって、それはたいした問題ではなかった。彼女はむしろ、自分をアッサクラーンの未亡人という身から、信徒の母たる身分に高めてくれた夫に感謝を捧げつつ、娘たちの世話をしながら使徒の家に暮す自分に十分満足していた。

彼女は太っていたので、彼女の歩き方を見て夫が笑うのを見ることも、彼女にとって楽しいことであった。

また、夫がときおり彼女の気持の良さを快く思うとき、彼女の言葉遣いのおかしい表現を楽しそうに聞くとき、彼女は幸せであった。

あるとき、彼女はこう言った。

「あの晩、あなたのお祈りをしましたとき、あなたをまねて一緒にひれ伏し（注1）たら鼻血が出るのではないかと驚いて鼻を押えるほどでした」

ムハンマドはそれを聞いて笑い出してしまった。そのように彼女はときには単純すぎると思われるほどに性格の善い人であった。

イブン・イスハークが伝えている……。バドルの捕虜が連れられて来たとき、預言者の妻サウダはアブラーの家族を訪ねていた。ちょうどその二人の息子のアウフとアウズのところにおいたのだが、そのときはまだ夫人たちにヒジャーブ（注2）を被るよう命じられる前のことであった。サウダが言った……。

「私が彼らのところにいたとき、捕虜が連れてこられたと聞いたので、さっそく家に戻ると使徒様はそこにおられました。そしてアブーヤズィード・イブン・アムル（彼女の亡夫・アッサクラーンの兄弟にあたる）が部屋の別の片隅で両手を首の後に縛られていました。アブーヤズィードがそのようにされているのを見たとき、私は自分を押えることができず…… “アブーヤズィードよ、そんなふうに捕虜となるよりも、勇敢に戦って死んだ方がよっぽどましではないですか” と言ってしまいました。

するとそこにいた使徒様が “サウダよ、神（アッラー）とその使徒の高い意志に反して彼を非ムスリムにしておくつもりなのか” と言って私に忠告なさいました。私は言いました。

“使徒様よ、実際あなたは真理に導かれたお方です。私はつい、アブーヤズィードの両手を首の後に縛られた姿を見て、押えることができずそう言ってしまったのです”」

その後も、サウダは神（アッラー）の使徒の家に暮していたが、アーイシャ・ Bint・アブーバクルが嫁いでくると、彼女は第一夫人の地位を若い花嫁に譲り、彼女が満足して過ごせるよう、気分が和らぐよう気を配るのであった。

やがて、預言者の家で何人もの妻たちが暮すようになる。ハフサ・ Bint・オマル、ザイナブ・ Bint・ジャハシ、ウンムサラマ・ Bint・アブーウマイヤたちである。しかしサウダは自分の友愛をためらうことなくアーイシャに捧げていた。また自分を除いてこれらの夫人たちが、夫の愛をめぐって競い合う姿にもいらだった気持を示すことはなかった。

しかし、ムハンマドは感情を押えた彼女が気にかかった。他の妻たちのように、感情を率直にあらわそうとしない彼女をいとおしいと思うことができなかつた。

彼はできる限りの努力を重ねて、心を彼女に開こうとしてみたが、彼の中の人間の感情が、そう言うことを聞いてはくれなかつた。彼にできることといえば、彼女にも、他の夫人たちにも平等に、宿泊の日数を取り、公平に生活の出費を分け与えることであり、感情の面では、人間である彼には、愛なくして彼女を受け入れることも、また自分の愛情をど

の妻にも公平に分配することもむずかしかった。

結局、彼女とは気持ちよく別れようと考えた。自分では、彼女を傷つけているのではないかと感じているこの問題を解決するためにである。彼女は少しも苦しんでいる様子を見せないが……。

ムハンマドは彼女の夜が来るのを待って、静かに別離の決意をうちあげた。

この恐ろしい話を聞いたとき、彼女はまるでまわりの壁がおおいかぶさってきて、息の根が止められるような苦しさを感じた。彼女はおとなしく、預言者の方を向くと、黙って顔をあげた。彼女の手を、助けを求めるようにのぼし、預言者はやさしくその手を取り、死ぬほど彼女を苦しめているその恐怖が、少しでも早く彼女から消え去るようにと願った。

落ち着きを取り戻した彼女は静かにささやいた。

「私を離さないで下さい。私は夫婦生活には欲はありません。でも復活の日に神（アッラー）があなたの妻として、私を送ってほしいのです」

そして悲しみにうなだれた。神（アッラー）の使徒が望まぬことに敢えて耐えてもらうことは、彼女には辛かった。離婚したいという彼の気持ちにこたえられない自分を責めていた。ひたすら、彼の満足するようにと、命を捧げるつもりの方であるのに……。彼女は、自分の重い体に老年の冷えきった感覚を覚えるのだった。アーイシャや、ザイナブ、ウンムサラマ、そしてハフサ、これらの夫人たちが、愛を求めて張り合う夫に執着している自分を恥じた。

これらの夫人たちの中で、自分の地位を確保しようとする事自体、自分にはふさわしくないことであると思った。それどころか、夫の夜を他の夫人たちと同等に分かつことは、あたかも自分に権利のないものを求めているかのように感じたのだ。

悲しくても「離婚して下さい！」と言うべきだと思ったが、それは言葉とはならなかった。

彼女は長い時間、苦しみをだえていた。ムハンマドはそのそばに黙って、同情を寄せたまなざしで彼女を見守っていた。

突然彼女は決心したかのように落ち着きを取り戻し、愛情にあふれた瞳で夫を見上げると静かに口を開いた。

「使徒様よ、私をあなたのもとに残して下さい。私の夜はアーイシャに譲ります。私には夫人たちの望むものは必要ないのです」

ムハンマドはこの大きく豊かな愛に、胸を打たれる思いであった。離婚の承認を得るためにサウダのもとにやって来た自分を後悔した。彼女の答えこそ、夫に負担をかけまいと願う気高い思いやりの心であった。

暗い夜の闇が白く明け始めると、ムハンマドは夜明けの礼拝を捧げるため、マスジド

(注3) へ出て行った。サウダはその場に立ち上がると、深く祈りを捧げるのであった。彼女の清らかな心は深い信仰に支えられて満ちたりた気持であった。

心ゆくまで彼女が祈るままにしておきましょう。彼女はこの選択を与えて下さった神（アッラー）に感謝を捧げているのです。年を経た彼女には夫との交わりを求める欲望はなく、ただ神（アッラー）が授けてくれた良き者との別離から自分を守ってくれたことに感謝を捧げて祈り続けるのです。

使徒が神（アッラー）のもとに召されたときまでこの家に暮して、サウダはオマル・イブン・アルハッターブの治世の末まで生きたと言われている。

アーイシャは、彼女の忠実な友情をなつかしみ、亡き彼女の思い出をこう語っている。

「一緒にいて、サウダほど私の好きだった人はいませんでした。ただし彼女が怒っているときを除いてのことですが」

(注1)

イスラームの礼拝では、立つ、ひれ伏す、坐る等の動作が繰り返される。

(注2)

ヒジャーブとは隔てる物の意味で婦人のベールや覆い、又、室内用の張（とばり）やカーテンなどをさす。ザイナブ・ビント・ジャハシの章「ヒジャーブ」を参照。

(注3)

礼拝堂。モスクのことである。

第4章

【アーイシャ・ビント・アブーバクルーその1】

縁組み

ハウラ・ビント・ハキームが、アブーバクルの娘アーイシャとの縁談をもちかけて、ムハンマドの心を開き、彼の最も信頼を寄せる友と縁組でも結ばれるという、二人の確認されたつながりがより深められたことは前にも述べたとおりである。

この婚約のために奔走したハウラは、歴史家アッタバリーが伝えるなかでこう語っている。

「アブーバクルの家を訪ねると、アーイシャの母、ウンムルーマーンがいたので、私は彼女に言った。“ウンムルーマーンよ、神（アッラー）のすばらしい知らせを持ってきたのですよ”彼女は“それは何ですか”とたずねた。“使徒様が、アーイシャと婚約なされるため私を送ったのです”と答えると“それは願ってもないこと、アブーバクルを待って下さい。いま来るところです”と言う。アブーバクルが現れると、私は同じように“アブーバクルよ、すばらしい知らせを持ってきたのですよ。使徒様が、アーイシャと婚約なされるために私を遣わしました”と言った。すると彼は使徒と自分の関係を考え込み、こう言うのだった。“それは合法的なことなのだろうか、彼女は彼の兄弟にあたる男の娘なのだ”

そこで私は急いで使徒様のもとに戻り、その件を尋ねた。するとこう言われた。“もう一度彼のところに戻ってこう言いなさい。あなたはイスラームにおける私の兄弟、あなたの娘は合法です……と”そこでアブーバクルのもとに行き、そう告げると“私が帰るまで待ってください”とアブーバクルは言った。

ウンムルーマーンの話では、彼はアーイシャの婚約の問題を精算しておきたかったのだという」

そのとき、ムトイム・イブン・アディユが、すでにアーイシャを息子のジュバイルにと申し出ていたのであった。

アブーバクルは、約束を破ることなど絶対にできない男だった。

アブーバクルがムトイムを訪ねると、その妻のウンム・ジュバイルもそこにいた。夫とともに多神教徒であったこの老女がこう言った。「アブーバクルよ。私たちの息子とあなたの娘を結婚させるのに息子をあなたの宗教に変えさせるつもりなのですかね」アブーバクルは彼女の言葉には答えず、主人のムトイムの方を向いて言った。「この人は何を言っているのだろう」彼は「彼女はこう言っているのですよ」と今聞いたことをくり返して答えた。

そこでアブーバクルはその家を出ると、神（アッラー）がこの約束を破棄してくれたものと気持ちが安らいで、家路を急いだのである。

家に戻るとアブーバクルはハウラに言った。
「使徒を呼んで来てください」

そこで早速ハウラはムハンマドを呼びに行き、そしてアーイシャとの婚約が成立したのであった。そのとき、アーイシャは6歳か7歳であったということしか知られていないが、彼女はすでにムトイムの息子ジュバイルと婚約をしていた。彼女の父アブーバクル・イブン・クハーファは、タイム一族の出身、母はウンムルーマーン・ビント・オマイルである。

アーイシャが属するタイム一族は親切で、勇敢、誠実で正しい見解を持つ氏族としてよく知られており、また婦人を扱う態度が立派であったことは、その譬えとされているほどであった。この先祖からの良き精神遺産を受けついで彼女の父は、なおかつ温和な性格、人付き合いの良さ、人の意見を非常に素直に聞く人としても評判が高かった。

イスラーム史家の彼に対する見方は、一致して「クライシュが最も誇るべき人物、クライシュ一番の賢者で、クライシュ族のもつ長所、短所をよくみきわめていた人物であり、彼は、人びとに救いの手をさしのべる親切な商人であった。また彼に接した人で、彼の見識と快い接客態度、その歓待ぶりを称賛しない者はない」と言われていた。

ムハンマドが神（アッラー）の使徒として遣わされてからは、アブーバクルは、これらの評判に加えてイスラームにおける初期からの信徒、自分のすべての財産を擲（なげう）って、イスラームを守り、積極的にその普及に尽した人物として後世に名を残している。

使徒伝を読まれた方はご存じだと思うが、そこにアブーバクルの影響で、イスラームに入信した教友たちの名がのっている。もう一度ここにあげてみると、オスマーン・イブン・アッファーン、アズバイル・イブン・アルアワーム、アブドッラハマーン・イブン・アウフ、サアド・イブン・アブーワッカース、タラハ・イブン・オバイドッラー等である。

預言者はよくこう言っていた。

「私がイスラームを呼びかけた人びとのなかでも、アブーバクルほどに少しの恐れも、とまどいも、ためらいもなく受けいれてくれた人はいまい」「アブーバクルのように、全財産を擲（なげう）って我々を助けてくれることは、とてもできないことだ」

預言者がこう言ったのを聞いたとき、アブーバクルは涙ながらに言った。

「使徒よ、私の財産も、私も、あなたのものではないですか」

アーイシャの母、ウンムルーマーンも教友たちの一人に数えられている。彼女はジャーヒリーヤ時代に、アブドッラー・イブン・アルハーリスと結婚したことがあり、子供もあったが彼に先立たれたのち、アブーバクルが彼女を娶（めと）り、二人の間にアーイシャとアブドッラハマーンが生まれた。彼女は、アブーバクルと預言者がマディーナに落ち着くと、子供たちを連れてそこに移ってきた。

中傷事件（注1）の後に、彼女が亡くなったときには、預言者は自ら彼女の墓に降りて、こう神（アッラー）に祈ったと伝えられている。

「神（アッラー）はあなたが受けた苦しみ、私の受けた苦しみをすべてご存じでいられる」

（注1）

後述の「アーイシャ・ Bint・アブーバクルーその8 偽りの中傷ーその1」および「アーイシャ・ Bint・アブーバクルーその9 偽りの中傷ーその2」を参照。

【アーイシャ・ Bint・アブーバクルーその2】

一般的風習

ムハンマドの閉ざされた心の扉が、アーイシャに向けて開かれたのは、そういった腹心の友の娘であったからこそと考えられるが、それ以上にアーイシャが聡明で、魅力ある可愛らしい少女であったからなのである。

彼女はイスラームの時代にマッカに生れた。創教4年か5年のころであった。

父親がムスリムであったからというだけでなく、彼女もまた姉のアスマーも、いまだに数えるほどしか信徒のいなかった時代にイスラームに帰依（きえ）した敬虔（けいけん）なムスリマであった。

ムハンマドは、彼女を幼いころからよく知っていた。自分の大切な娘のように思っていた。目の前で、彼女はどんどん大きくなっていき、明るい頭の回転の良い少女と成長していった。正しい言葉遣いや、堂々と正しい主張をする態度は、マフズーム一族が彼女の養育を受け持ったからであろうか。

ムハンマドの彼女に寄せる深い愛情のほどは、婚約後に母親のウンムルーマーンにこう言って注意するほどであった。

「ウンムルーマーンよ、私が彼女のなかに棲（す）んでいると思って彼女を大切にしてください」

ある日、アーイシャが怒っているのを見たムハンマドは、母親を軽くたしなめ、「ウンムルーマーンよ、彼女を私とと思ってくださいと頼んだではないですか」と言ってアーイシャの肩を持ったのであった。

マッカでは、この親しい友人の間を結んだ縁組の知らせを聞いたとき、驚いた様子はない

かった。それどころか、期待どおりの出来事として受けとめていた。

預言者に敵意を持つ人びとさえ、何も言うことはなかった。激しい敵意を持つ人びとの、誰一人としてムハンマドとアーイシャの結婚をとりたててとがめはしなかった。

事実であろうと、つくりごとであろうと、ことあるごとにどんなさ細なことでも彼をやっつける材料となると思えば、絶対に見逃さない彼らであるのに……。

実際、この結婚に何かとがめられるような点があったであろうか？

アーイシャのように幼い、7歳にも達するか達しない少女との婚約を、とやかく言う人もいるかもしれない。しかし、彼女は当時、すでにジュバイルと婚約していた。アブーバクルがジュバイルの父との約束を解消するまで、ハウラに何も言えなかったのはこのためである。

また、彼女のように幼い少女と、53歳になる中年の夫との結びつきをとやかく言う人がいるかもしれないが、これにもどんな不思議があるのだろうか？ 父親のような年の男性と結婚する女性は、彼女が初めてであったわけではない。他にもそういう女性はずいぶんいたではなかったか。

長老、アブドルムッタリブが、アーミナの従妹（いとこ）にあたるハーラを妻に迎えた日は、彼の一番末の息子アブドラーが、ハーラと同じくらいの年齢のアーミナと結婚したその同じ日であったという。

またオマルが、アブーバクルに娘のハフサを嫁がせたいと申し出たとき、この二人の年の差も、ちょうど使徒とアーイシャの年の差くらいあった。

しかし、その結婚が行なわれた当時から何世紀も経たいま、西欧の学者の中には、時代と風俗の移りを無視して、その点だけを、「中年の夫と幼い処女との不自然な組合せ」と言う人も多い。

そして、好色のめがねを通してヒジュラ（注2）以前のマッカで行なわれた結婚を今日の西欧での出来事と比べて見ている。

現在西欧では、一般に女性は25歳前に結婚することは少ないが、その年齢には現在でもアラビア半島では遅いとされている。これは半島だけに限らず、農村や、東部、西部のベドウィンの間でももちろんである。

また、ある学者が、半島を訪れたさいに認識し、帰国後つぎのように述べている。

「アーイシャは、幼い年にもかかわらず、一般にアラブの女性たちがそうであるように、非常に早熟であった。アラブの女性たちは20歳を過ぎると老け始めてくる。しかし、この婚姻に関してはムハンマドの伝記を書く人びとは、今日、自分たちの生活する社会の目でそれを見つめ、このような婚姻がいまだにアジアでは普通に行なわれていることにふれていない。

また、この習慣は、東ヨーロッパでも、現在も残っているし、またスペインやポルトガルではつい最近まで当然のこととして行なわれていたし、合衆国のある山岳地帯では今日でも不思議なことではない」

(注2)

移住。ここでは622年に行なわれたムハンマドのマッカからヤスリブへの聖遷のことである。この出来事を記念してこの年を元年とするヒジュラ暦（イスラーム暦）が始まった。

【アイシャ・ビント・アブーバクル-その3】

ヒジュラ-その1

ムハンマドはまだ幼い少女を、おしゃべりや遊びの楽しみから切り離したり、あるいはその小さな肩に結婚生活の重荷や責任を負わせたくなかった。アイシャをそのまま父親の家に残し、何の苦勞もなく友達と遊ばせておいた。

彼が彼女から得た恵みは、アブーバクルの家に寄るたびに、彼のそばに走り寄ってくる彼女の愛らしさが、彼を待ち受けている幾多の苦難の問題や、自宅にいるときにも彼を襲う孤独感と、異郷感を忘れさせてくれることであった。

孤独感-家ではサウダが彼の子供たちの世話をしてくれているのに、異郷感-マッカにいて、しかもここは先祖代々住み慣れた故郷であるのに、この感情はなぜか絶えず彼を襲ってくるのだ。そんな感情に耐えきれなくなると、いつも友人のアブーバクルの家に行き、小さな婚約者を相手に楽しいひとときを過ごすのであった。彼女の機知にあふれた聡明な朗らかさに、深い愛情を傾けるのが彼の慰みであった。

また、アイシャにとっても、偉大で崇高で威厳ある神（アッラー）の使徒が、彼女のもとにくつろいで楽しそうにひとときを過ごしては、彼女の素朴な愛らしさにひきつけられているのをうれしく思った。

また使徒が、アブーバクルの家を訪れるときは、早朝か夕方にきまっており、けっしてそれ以外の時間になることがなかったのも、アイシャを喜ばしていることの一つであった。

ムスリムへの圧迫は、すでに頂点に達する激しさで、信徒たちはマッカからヤスリブへとのがれて行った。当時使徒とともにマッカに残っていたものは、アブーバクルとアリー・イブン・アブーターリブとを除けば、あとは監禁されている者か、裏切りを余儀なくされた者たちだけであった。そんなある日のことであった。正午の陽は高く、酷暑の真昼であった。大地は焼けるような熱で静まりかえって、人びとは暑さをのがれてみな家にひきこも

り、けだるいような静寂さの中であった。アーイシャは、家の中庭で子供らしく強い日ざしにもめげず遊んでいた。

アーイシャは突然戸口に近寄ってくる足音を感じた。じっと耳を傾けると、それが愛する婚約者の足音であると悟って、彼女は急いで戸口に走り寄り、待ちきれぬ様子で戸をあけた。

人びとの避けるこの暑いさなか、家の前に使徒の姿を見とめたとき、アブーバクルは、その場に立ちすくむ思いであった。「こんな時間に、神（アッラー）の使徒がみえるとはよっぽどの重要事が起ったに違いない」

預言者が入ってくると、アブーバクルは彼に座を譲った。使徒はそこに腰をかけると重大な何かの出来事に、気を張りつめている様子であった。アーイシャも、姉のアスマーも緊張してこの様子を見守っていた。

使徒は部屋にいる人びとには目もくれず、アブーバクルに、「ここから人を出してください」と言った。

アブーバクルは「使徒よ、ここにいるのは私の二人の娘です」と答え、それから心配そうに、「どうなさったのですか」と聞いた。

使徒の「ついにヒジュラ（注3）の許しが下ったのです」という答えにアブーバクルは、「同行します！ 使徒よ、同行します！」と叫んだ。

以前、アブーバクルは何度もヒジュラを願ったが、「あせらないでくれ、おそらく神（アッラー）は、あなたに連れとなるよう命じられるであろう」とムハンマドに止められていた。

アーイシャと、アスマーの聞いているところで、二人の友人はクライシュ族の怒りについて話していた。アカバの誓いの後、ムハンマドへの協力者が、クライシュ族以外から現れたのだが、自分たちの国以外のところに協力者がでて、しかもムハージルーン（注4）として逃れて行った信徒たちが、そこに落ち着き保護を受けているのを知ったクライシュ族は、ムハンマドもまたそこへ出発するのではないかと注意し始めた。いよいよ自分たちと戦う準備を始めたと思ったのだ。

そこで集会所に集まって、ムハンマドの件をどうするか相談することにした。この集会所というのは、クサイイ・イブン・キラーブの館で、クライシュ族の人々はここで部族の重要事を話し合ったり決議を行なうことにしていた。そのとき集まった人々の名は、オトバ・イブン・ラビーアとシャイバの兄弟、アブースフヤーン・イブン・ハルブ、トアイマ・イブン・アディユ、ジュバイル・イブン・ムトイム、アッナドル・イブン・アルハーリス、ザムア・イブン・アルアスワド、アブールハカム・イブン・ヒシャーム（すなわちアブージャフル・イブン・ヒシャーム）、ハキーム・イブン・ホザーム、ウマイヤ・イブン・ハラフ等で、その他クライシュ族に属さない人々も参加していた。

いろいろな案が出たが、結局最終的に、アブージャフル・イブン・ヒシャームの意見をとりあげることになった。それは各氏族から屈強の青年を一人ずつ選び出し、おのおのに

鋭利な剣を与えてムハンマドを襲わせ、全員が一打、切りつけて、彼を打ち殺す。そうすれば血の復讐（注5）は全氏族に分散して返り、ムハンマドの属するアブドマナーフ一族も、クライシュの全氏族を相手どっていどむことはできまい。代償金の支払いだけで済むわけである。

そこで神（アッラー）は、ヒジュラの許可を使徒に下したのであった。連れにはアブーバクルが選ばれた。

アーイシャは別れが辛く、気がかりであった。愛する預言者を見つめ、また、愛する父を見あげると、彼は喜びに涙を流していた。父の今日のその様子を見るまで、幼い彼女は、人はうれしさのあまりにも涙することがあるのだということは知らなかった。

急な旅立ちの準備が始まった。アブーバクルはアブドッラー・イブン・ウライキトを呼びにやった。この男は、砂漠の道に通じた案内の達人であった。アブーバクルは、そのためのために二頭のラクダを彼に渡しておいた。

ムハンマドは、従弟（いとこ）のアリーを呼び、この重大な決意を打ち明けると、彼にマッカに留まって、自分の去ったあと、人々から預かっていた物の返還などの面倒をみるようにと頼んだ。

いよいよ出発のときが来ると、ムハンマドは、アブーバクル家の高台に立ってカアバに視線を投げかけ、またマッカの街をながめて悲痛な声でこう言った。

「あなたは私の最も愛する地、あなたは神（アッラー）の最も愛される地、もしあなたの民が私を追い出したりしなければ、決して私はここを離れなかったのに……」

そしてアーイシャをかえりみて、別れの微笑を浮かべようとつとめたが、アーイシャは突然に訪れたこの別離に、自分が正気であるのか、夢の中の出来事なのかわからないありさまであった。

アブーバクル家の裏口から二人の友は抜け出した。アブーバクルは5千ディルハム（注6）の大金を持って出たが、これは彼と、彼の家族に残された全財産であった。二人はアリーと、残されたアブーバクルの家族以外には、マッカの誰にも気づかれぬよう出発したのであった。

二人の旅人は、マッカの南、サウル山によく知った洞窟があったので、まずそこに向かって行った。家に残ったアーイシャは、一人気をもんでいた。

一方、アーイシャの兄のアブドッラーは、街に出て行き、人びとの話に耳をそばだてた。姉のアスマーは陽が沈んでから、こっそりと洞窟に運ぶ食糧の用意をした。

アブドッラーからの話では、アーイシャは、多神教徒たちが預言者の旅立ちを感じとり、居場所をつきとめるか、あるいは連れ戻した者のために、百頭のラクダを与えるという条件を出したと聞いた。

アーイシャは、もし、神（アッラー）とその使徒への深い信仰に支えられていなかったら、絶望のあまり、自分が発狂してしまわんばかりであったろう。しかも、彼女は兄が下

男のアーミル・イブン・フハイラに、マッカの民の牧童たちとまじって、共有放牧地で、日中、羊の群に草をやり、夕刻になったらアブーバクルの羊の群を洞窟の前まで連れて行くようにと言っているのを聞いていた！

アーイシャは一日中、ただ時のたつのを数えて過ごしていた。時はゆっくりと、まるで何年もの年月が過ぎて行くかのようにであった。彼女は耳を澄まして、新しい知らせを待っていた。

夕方になると、姉のアスマーは外出の準備を始めた。アーイシャは愛する二人の旅人へ、くれぐれもよろしくと伝えてくれるよう頼むのであった。そしてアスマーの帰りを待ちわびながら、じっとその帰り道を見つめては気をもんでいた。

洞窟から帰ってきたアスマーに飛びつくと、アーイシャは、愛する人と父を見てきたその目に、握手をかわしてきたその手に、二人の声を聞いたその耳に口づけを浴びせかけるのであった。そして姉を坐らせると、二人の様子を詳細に尋ねた。

アスマーは洞窟が苦痛な居場所であること、また、使徒が家族とも別れ、この狭い洞窟で、苦痛をじっと我慢している姿をみて悲しんだアブーバクルが言ったことばを話して聞かせた。

「たとえ私が殺されても、私は一人の男にすぎないが、もしあなたが殺されたら、民はほろびてしまう」……と。

預言者からは恐れと不安は去って、こう答えた。

「悲しむことはない。神（アッラー）は我々とともにおられる」……と。

アーイシャは何度も何度も繰り返し、姉に話をねだった。

やがて疲れきって眠りに落ちると、彼女の心は愛する人の隠れ住む洞窟のあたりを駆けめぐるのであった。

（注3）

移住。ここでは622年に行なわれたムハンマドのマッカからヤスリブへの聖遷のことである。この出来事を記念してこの年を元年とするヒジュラ暦（イスラーム暦）が始まった。

（注4）

ヒジュラ（移住）を行なったイスラーム教徒。その単数形をムハージル、複数形をムハージルーンという。

（注5）

アラブの習慣であった。ある者が他の氏族の者を殺害した場合には、殺された氏族の者は殺した氏族の者に対し、同等の復讐をする権利をもった。

（注6）

ディルハムは当時の通貨。

【アーイシャ・ビント・アブーバクル-その4】

ヒジュラ-その2

二日目が過ぎた。ムハンマドとその友を追って、クライシュ族の一団が捜索に出たという新しい知らせがはいった。

夜になって、こっそりと食糧を運んできたアスマーが帰って来ると、彼女は、追手がその洞窟までやって来て、足を踏み入れようとしたが、そのまま降りて行ってしまったこと、それは蜘蛛の巣が、洞窟の入口をふさいで、中にいる二人を守ったからであったこと、また追手がまさに洞窟に踏み込まんとしていたときの、その足音をすぐそばで耳にしたときの父のハラハラした話を聞かせた。

「もし、一步でも足を踏み入れていたら、我々は見つかっていた……」とアブーバクルが言うと、ムハンマドは「二人だけだと思っただけではない。神（アッラー）が我々とともにおられる」と言った、……と。

三日目の夜が来た。アーイシャは気が気でなく、時のたちゆくのをひたすら待っていた。姉の帰る道を見つめながら……。

姉の帰りはいつもより遅かった。闇の中をアスマーの姿をみとめようと、彼女は神経を昂ぶらせていた。じっと耳を傾けて、どんな物音をも聞き逃すまいとしていた。夜の風がその足音を遠くから伝えてくれるのではないかと……。

夜は更けていった。気がかりでそこに立ちつくしたまま、彼女はあれこれと思いをめぐらせていた。すると息をはずませ、足音を乱してついにアスマーが走って帰って来た。

その正常でない様子を見て、アーイシャは心配のあまり、その場に立ちすくんでしまった。アスマーの腰帯が破れて、半分ちぎれていたからである。

気を失わんばかりのアーイシャを、あわれに思ったアスマーは、とりあえず、二人が無事に洞窟から出発したことを告げると、一息ついてから、つぎのように今宵の出来事をアーイシャに話し始めた。

歴史に輝かしい1ページを加えたこの夜、道案内役のアブドッラー・イブン・ウライキトが、二頭のラクダを連れてやって来た。アブーバクルが、何日か前に預けておいたラクダである。そしてもう一頭、自分のラクダを洞窟の入口に止めた。使徒とその友は、表に出た。

アスマーは、二人の食糧を入れたふろしき包みを持ってきたが、それを縛りつける紐（ひも）を忘れた。いよいよ出発となったので、包みを持たせたいと思ったが、それをラクダに結びつける皮紐はどこにもなかった。そこで自分の腰帯をほどき二本に裂くとその一本で包みを縛りつけ、残りの半分を帯に巻いた。

アブーバクルは、二頭のラクダを念入りに調べ、良いほうを選ぶと、ムハンマドに近寄

せ、「さあお乗りください」と勧めた。ついで、アブーバクルももう一頭のラクダに乗った。そしてその後には下男のアミル・イブン・フハイラを乗せた。

マッカの南方、道とも言えぬ道を旅人たちは急いで消えて行った。アスマーは、その後姿が見えなくなるまでじっとみつめた。そして追手の目に注意を払いながら一人、父の家に帰って来たのであった。

アーイシャは、ぼんやりとして、あたりのことなど何も目にはいらぬようであった。身体だけがそこに残って、心は二人の後を追いかけて行った。そのとき、激しく戸口をたたく音がした。

アーイシャは動くこともできず、立ちすくんだ。ザート・アッニターカイニ（注7）（二本帯の女）は、その夜の訪問者の応対に出た。するとそこにはアブージャフル・イブン・ヒシャームを含むクライシュ族の数人が立ちかまえ、彼女にきつく質問をあびせた。「アブーバクルはどこに行った？」

「父はどこにいるのかわかりません」と彼女は答えた。

それは嘘ではなかった。父と預言者が洞窟を出て砂漠のどこか知らない道へ消えて行ったときが、彼女の見た二人の最後であった。どこへどう駆けて行くのか彼女にはわからなかった。

何の手がかりも得られないと知ると、アブージャフルは手を上げて、彼女の耳飾りがふき飛んだほど頬を強くひと打ちすると、連中とまわりをおどしながら帰って行った。

それから何日も、何晩も過ぎた。マッカではクライシュ族が、跡を追うにも何の手がかりもないので、すでに安全な場所にかくまわれて、自分たちの手が届かなくなっているのではないかと恐れ始めていた。

ムハンマドとその友は救われた。

いろいろな噂が流れていたが、ついにヤスリブからつぎのような知らせが届いたのである。

アンサール（注8）は、朝の祈りの後には、いつも町の郊外に預言者の到着を待ちわびて迎えに出ては、太陽が頂点に昇り影がすっかりなくなるまでそこで待っていた（注9）。

ある日、いつものように待っていたが、日影がなくなったので、人びとは家に入り休んでいた。すると、その物見台にいたユダヤ人の男が叫ぶ声を聞いた。

「カイラ（注10）の人びとよ、あなた方の幸運の待ち人がやって来ましたよ」

そこで人びとは、ムハンマドを迎えようと、急いで飛び出してきた。

そのとき、ムハンマドは、アブーバクルとともに木陰に休んでいた。二人とも同じくら

いの年齢であったうえ、多くの人びとは以前に預言者を見たこともなかったのに、歓迎に出迎えたが、さてどちらが彼らの預言者であるかアブーバクルなのかわからなかった。やがて影がそのうちの一人の頭上から移ると、他の一人が立ち上がって自分の衣で日陰をつくってやるのが見えたので、どちらが彼らの預言者であるかがわかったのである。

その知らせは、ヤスリブのすみずみまで伝わり、あちらこちらから歓声が上がった。その偉大なムハージルを見ようと駆け集まってきた群衆で道はいっぱいになり、歓迎の歌声が、ヤスリブの空に響き渡った。

アーイシャは恋人の居場所を知った。同じようにそれを知ったクライシュ族は、いまやどうすることもできなくなってしまった。今度は自分たちが、さて明日は彼がどんな攻撃に出てくるのかと恐れながら待つ番となったのである。

一人の友と、ムスリムでない案内人、そして下男を一人供に従えただけで、マッカを発(た)った旅人、そのたった一人の旅立ちによって、自分たちの勝利は不可能となり、侮辱の杯を飲まざるを得なくなったクライシュ族は打ちのめされ、萎縮してしまった。

このヤスリブへのヒジュラは、イスラーム史の最も重要な歴史の始まりとされ、ここにヤスリブの町自身、祝された栄光の新しい時代の始まりを迎えたのである。

(注7)

二本帯の女という意味で、この出来事以来、アスマーの呼び名となった。

(注8)

援助者。すなわち預言者を受け入れたマディーナの人々のことである。

(注9)

砂漠の国では、真昼の日陰のない時間帯を外で過ごすことはできない。

(注10)

マディーナの二大部族であるアウスとハズラジの人々をさしている。この二部族の共通の祖先の名がカイラである。

【アーイシャ・ Bint・アブーバクル-その5】

花嫁

約1か月後、預言者の娘たちを連れに、ヤスリブから、ザイド・イブン・ハーリサがやって来た。ザイドは、アブーバクルからの、息子アブドゥラーにあてた手紙も託されていた。それにはウンムルーマーンと、二人の娘、アーイシャとアスマーを連れてヤスリブに出発するようにと指示されていた。

旅立ちの準備が始まった。今やマディーナ（預言者の町）と呼ばれるようになったヤス

リブに向かって一行は出発した。

二、三日、アーイシャはうれしさのあまりにはしゃぎどおしであった。そのうち彼女のラクダが道はずれて行ったので、驚いたウンムルーマーンは、「娘が、花嫁が！」と助けを求めた。

アブドッラー、そしてタラハ・イブン・オバイドッラー、ザイド・イブン・ハーリサは、急いで駆け寄って、道はずれたラクダをもとに戻した。それ以後アーイシャは、ラクダの背の上で静かに目を閉じて、まもなく会える愛する人々のことを想った。

マディーナで、ムハンマドは、アーイシャのための住まいの準備を始めた。

伝承によると、彼は4日間クバー（注1 1）に滞在した。その間に、イスラーム史上最初のマスジドの建設が始められたと言われている。そこはアンサールのクルスーム・イブン・アルハラムのミルバド（ラクダ等をつないでおいたり、あるいはなつめやしの乾燥場に用いていた空地）であった。

金曜日に、愛用のラクダ、カスワーに乗った預言者は、サーリム・イブン・アウフ一族のもとに出かけ、ここで昼の礼拝（注1 2）のときを迎えたが、これが彼のマディーナでの最初の金曜礼拝（注1 2）であった。

その後、ラクダの歩を進めた預言者を、あちこちから迎え出た人びとは、「さあどうか、私たちのところへご滞在ください。私たちは、人数も多く、あなたさまをお守りする装備は、十分にできています」と言って歓迎の意を表わした。

ムハンマドは、人びとに感謝しつつ、「私のラクダに道を開けてください」と答えていた。

ラクダはミルバドまで来ると、そこに止まった。その近くには、アンサールのアブーアイユーブの館があり、預言者はミルバドにマスジドと住居ができあがるまで、この館に滞在していたといわれる。ムハージルーンもアンサールたちも一致協力してその建立に精出した。

ついにマディーナにマスジドが建ち、そのまわりに9つの住まいができ上がった。あるものはシュロの葉と土で作られており、またあるものは積み重ねられた石造りの、9戸の家（注1 3）であった。各家の戸口は全部マスジドの広場に向けて開かれていた。このうちの一棟にサウダが住んで、ムハンマドや、その二人の娘、ウンムクルスームとファアティマの世話にあたっていた。

預言者の4人の娘のうち、ルカイヤは、夫のオスマーン・イブン・アッファーンとともに暮し、ザイナブは、夫のアブールアース・イブン・アッラビーウとともにマッカに残っていた。このザイナブの夫は、いまだに多神教徒であったが、この夫婦の間は、イスラームによって切り離されることもなかった。

預言者のマスジドと住まいが完成されて、ムスリムたちは、マディーナに居が定まり、敵の圧迫のないこの地に安住できることになった。

マディーナに移って数か月を経たいま、アブーバクルは3年前に、マッカで結んだアーイシャとの結婚の約束を遂げるようにとムハンマドに話しかけた。

ムハンマドは快くそれに答えた。アンサールの人びとは、男たちも女たちもこぞってこの縁組で預言者の義父となったアブーバクルのもとにお祝いに駆けつけた。当時彼は、ハズラジ（注10）のハーリス家に身を寄せていた。

アーイシャは結婚の当日をこう述懐している。

「使徒様が家にみえると、アンサールの人びとが、使徒様をとり囲んで集まっていた。私は揺りかごのようなブランコに乗って遊んでいたのですが、母が呼びに来て、私を降ろし、私の髪を結い直して、顔を洗わせたのです。それから私を連れて入口の前まで来ると、そこで私の息のはずみが整うまで、少し時間をみてから、私を中に入れました。使徒様はベッドの端に腰をかけておられて、母は私を彼の膝の上に乗せるとこう言ったのです。

“あなたの家族となる人びとですよ。あなたにも、そして皆さんにも、神（アッラー）の祝福がありますように” ……と。

人びとは立ち上がり、部屋を出て行きました。使徒様は、私たちの家で私を妻となさったのでした。ラクダも、羊のザバハも行なわれませんでした。ただ、サアド・イブン・イバーダが、いつも使徒様に届けていた大盆を私たちのために送ってくれただけでした」また二人に、ミルクの壺が届けられ、ムハンマドはそれを飲み、続いて花嫁も恥じらい、とまどいながらそれを飲んだ。

アーイシャは可愛い花嫁であった。小柄な身体に大きな瞳と波つった髪、色白でほおの赤いきれいな花嫁であった。

花嫁は新しい住まいに移った。そこはマスジドの周りに建てられた住まいの一つであり、日ぼし粘土と、シュロの葉の組み合わせでできていた。部屋にはリーフでとり巻かれた皮のふとんが置かれただけで、ふとんと床の間にムシロが一枚敷かれているだけであり、戸口には毛でできたカーテンが下がっていた。

この質素な家で、アーイシャの栄誉ある結婚生活が始められたのである。それは今日の時代でも、また明日も歴史上に語り続けられるところとなり、またここにイスラームと、その預言者にとっても重要な彼女の地位が築かれたのである。

彼女は若かった。若い彼女を西欧の東洋学者たちは、子供として扱っているが、しかし某東洋学者が証明するように、「預言者の家に足を踏み入れたその瞬間から、全員が彼女の存在を意識したほどである。もしそこに、自分がこれから何をすべきなのか、何に向かって行くべきなのか熟知した娘がいたとすれば、それはアブーバクルの娘アーイシャにほかならない。彼女の人は、マスジドの続いたこのムハンマドの家にやってきた最初の日から形成されていったのである……」

アーイシャ・ビント・アブーバクルは、この家で成長し、この家で完成されたと言われている。

夫が彼女のために、遊び仲間を連れてきたり、また肩に乗せて、窓の外で戦争ゴッコを

して遊ぶハバシャから帰還した子供たちを見せてやったりした。そんなあどけない時代から、むずかしい化粧の問題を問われるほどの知識豊かな婦人となるまで、預言者の手許で彼女は成長を続けたのである。

化粧の問題を問われたとき、彼女はこう答えている。「あなたに夫がいるなら、（夫のためにはできる限り美しくなりなさい）仮に、あなたの目を取り除いて、もしもそれ以上に美しく置きかえられるものならそうおやりなさい」

彼女はまた、妻がいつまでも夫に悲しい顔をみせているのを嫌った。

「敬虔（けいけん）な婦人は、たとえ身内の不幸に悲しんだとしても、三日を越さないように。夫の死を悲しむときは別ですが」と言ったという。

サウダは彼女と等しい存在ではなかった。アーイシャが心身を注いで愛した夫のもう一人の妻の存在は、多かれ少なかれ気にはなったが、その人が夫の心の中に大きな位置を占めているとは思えなかった。しかしアーイシャを絶えず悩ましたものは彼女が夫の心に入り込む以前に、すでに夫ムハンマドの心の中で確固たる地位を占め、4分の1世紀もの間、誰にも荒らされることなくその地位を保っているハディージャへの変ることのない夫の深い愛であった。

若い花嫁は、今は亡きハディージャが、いまだに夫の愛を自分とともに分けあっていることにひどく妬みを感じるのであった。彼女は遠くマッカの土の下に眠っている人である。たとえアーイシャが皮肉な冗談を言ったとしても、かたきもとれない。たとえ自分の若さを誇ろうとしても、また自分だけが処女のままだと誇らうとしてもそれできないのだ。

アーイシャは、亡き夫人のことは無視しようとしたが、それはできないことであった。ハディージャの面影は、永遠に夫ムハンマドの心に残り、彼女の名は、彼女の声は、夫の舌に、耳に、彼女の思い出は夫の家にも生活にも生きているのであった。

なによりも苦しいことは、何か月かが過ぎ、何年も過ぎてもアーイシャは、一人の子供も孕（はら）まなかった。あのクライシュ族の老女が（アーイシャはハディージャのことをそう呼んでいた）二人の息子と4人の娘に恵まれているのに……。

アーイシャは、夫もまた部族の男性たちもみな子供を誇りとし、その出生を願っていることを知っていた。夫がハディージャとの間に生れた娘たちを、目の中に入れても痛くないほど可愛がっている様子を見ている。

もし夫が、その深い愛で彼女を守ってくれなかったら、また彼女の手にはおえないこの運命に対して、彼女の信仰心が忍耐を与えてくれなかったとしたら、この辛い苦しみに、どうすることもできなかったであろう。

彼女は愛する夫の娘たちに、自分の母性の渴きをなぐさめてくれるものを見、できることなら養女しようと願うときさえあった。しかしながら、すぐに彼女たちはハディージャの娘なのだと思い出され、自分と娘たちの間には厚い壁がたちふさがっているように感じてしまうのであった。しかも、どの娘にもハディージャの面影が残されているように思わ

れ、子供に恵まれない苦しい感情に心をかき乱されるのであった。

アーイシャはこの悲しい思いに浸らないためにも、自然、自分の甥（おい）や姪（めい）に押えられた母性の愛情を向けていった。

ことに姉のアスマーの息子アブドッラー・イブン・アズバイルを、自分の実の息子のように愛育し、ウンム・アブドッラー（アブドッラーの母）と呼ばれることさえあった。兄のアブドッラハマーンが死んだときには、その息子のアルカーシムと娘のアッティフラを引き取った。

アルカーシムは、「彼女は最高の母であった」と言っている。

また同じように、彼女はハディージャ夫人の亡きあと、誰もが達することのできなかった夫の深い愛情を得ることにより、子供に恵まれない心の痛手をなぐさめようとした。

（注 10）

マディーナの二大部族であるアウスとハズラジの人々をさしている。この二部族の共通の祖先の名がカイラである。

（注 11）

マディーナの南の郊外。

（注 12）

イスラームでは一日5回の礼拝が定められている。日の出前の礼拝、昼の礼拝、午後の礼拝、日没直後の礼拝、そして夜の礼拝である。また、金曜日の昼には masjid において合同礼拝が行なわれる。

（注 13）

この9戸の家とは、棟つづきの独立した9つの部屋であったようである。